

世

米

亭

編

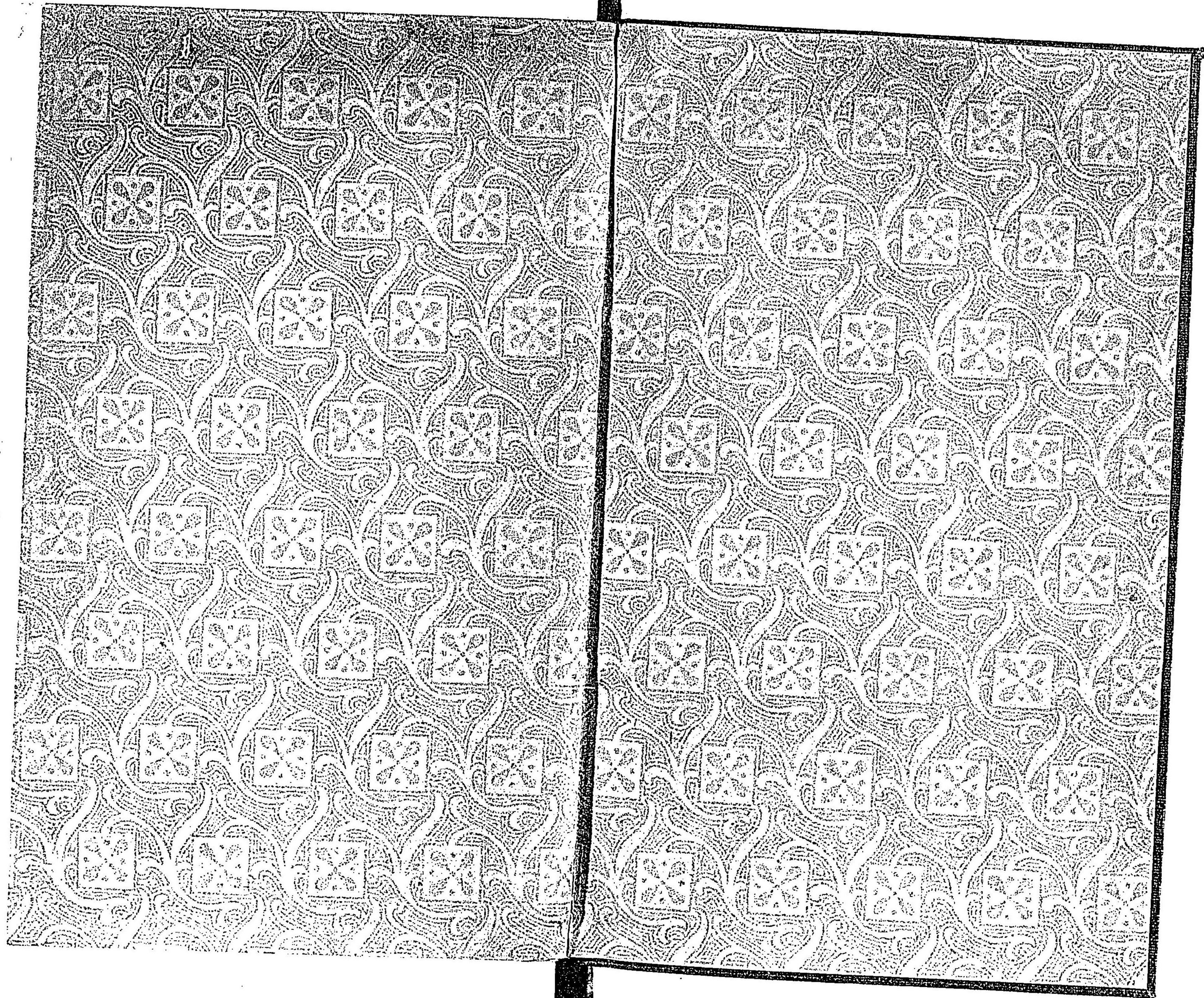
才

鐵

短

鐵

集





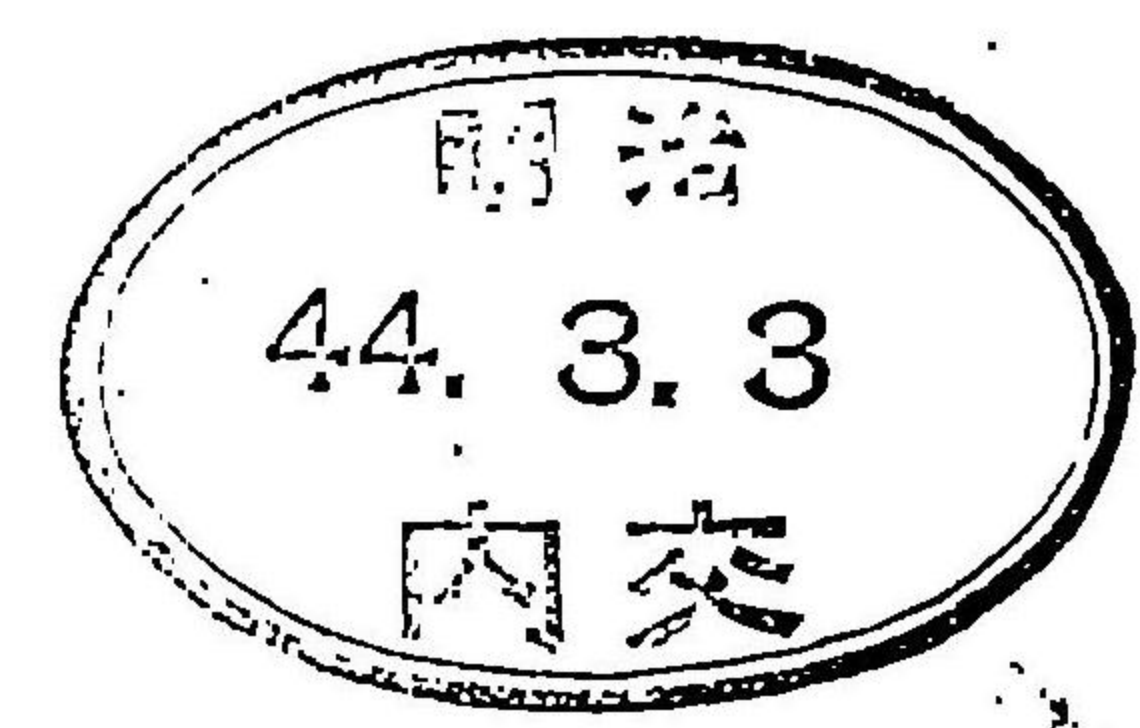
寸鐵短

辻井亭編

東京

歌集

大日本圖書株式會社



明治
44. 3. 3
丙亥

持71
709

緒言

編者は元來歌人にあらず。歌のよしあしを見わける事に就ては全然素入である。然らば自ら無能力者なるを知りながら何故に歌集を編するに至りしかは一言を要する。

編者は未熟者ではあるが、演壇上の人たるを以て天が我に興へたる使命と信じて居る者で、二十年來多少の苦心をした者である。そもく政治、學術或は宗教の演説家説教家教師等が、最も苦心する所は、如何にして聴衆に自己の所説を容易く理解せしめ得るかにある。之が爲に古今の逸事、金言等を知る事も必要であるが、千百の詩歌を暗んじて隨所に活用する事を得ば最も妙である。西洋詩、漢詩等何れも特色はあるが、大和歌は人の心を種として萬の言の葉とぞなれりけると歌聖も云はれた如く、短くし

目次

國家

一 瑤臺の薰風

二 搖がぬ御國

三 愛國の精神(大和魂)

齊家

一 家庭の和樂

附録(無邪氣なる小兒)

二 家庭の教育

三 親心

四 子心(孝)

五 夫婦

六 姑媳

一頁
一頁
一九
二八
四一
四一
四二
四三
四四
四七
五九
七五
九〇

七 兄弟 九二

八 貧富 九四

人生

一 月日過ぎ易し 一〇三

二 老 一〇六

三 病 一二七

四 死 一九

五 人生觀(樂觀、天恵、感謝) 一三〇

六 人生觀(悲觀) 一三九

修身

一 心の鏡 一五三

二 勤勉(學問) 一五三

三 勤勉(職業) 一六四

四 誠實(眞實、正直) 一九二

五 克己忍耐 二〇〇

六 罪惡分争(罪念、色情、迷) 二一五

七 懺悔反省 二四三

八 柔和 二四五

九 潔白 二四七

十 教育 二五一

十一 質素 二七三

十二 攝生 二七九

十三 勇氣 二八六

所世

一 世態 二八九

二 献身犠牲 二九六

三 友情 二九八

四 愛(同情) 三〇八

五	注意謹慎	三二六
六	報恩	三三四
七	原因結果(因果應報)	三三五
宗教		
一	神(信仰)	三三八
二	佛(悟道)	三四七
三	念佛(祈念)	三六一
四	來世(極樂、天國)	三六六
五	宗教附錄	三六九
雜		
一	春	三七二
二	夏	三七三
三	秋	三七六
四	冬	三八〇
		三八二

五	農事	三八三
六	花實色々(雜の雜)	三九二
七	餘興	四〇八

(目次終)

寸鐵短歌集

國家

一 瑤臺の薰風

○御製

此春は梅鶯も忘れけり民安かれと思ふばかりに

○御製 御題 夏夜懷

まつりごと出てさくまはかくばかり暑き日なりと思はざりしを

○御製 御題 夜遊懷

夏之夜もねざめがちにぞあかしける世のため思ふ事多くして

○御製

白露のおきふし毎に思ふかな民の草葉のさかゆかん代を

○御製

冬深さねやのふすまを重ねても思ふは賤が夜寒なりけり

○御製

御題 炭竈

炭がまにかよふ山賤寒からむ朝霧深し小野の山路

○御製

古の文見るたびに思ふかなおのが治むる國はいかにと

○御製

政事出て聞きぬと思ひしは夢なりけりな庭鳥の啼く

○御製

照るにつけ曇るにつけて思ふかな我民草の上はいかにと

○御製

いそのかみ古きためしをたづねつゝ新しき世の事も定めむ

○御製

罪あらば朕を罪せよ天つ神民は我身の生みし子なれば

○御製

千早振る神ぞ知るらむ民の爲世をやすかれと思ふ心は

○御製

あし原の國富さむと思ふにも青人草を寶なりける

○御製

四方の海みなはらからと思ふ世になど浪風のたちさわぐらむ

之は日露戦争中の御感懷なりと拜承す

○御製

賤が住むわらやのさまを見てぞ思ふあめかぜあらさ時はいかにと

○御製

山の奥島の果までたづね見む世に知られざる人もありやと

○御製

敷島の大和心のをしきは事ある時ぞあらはれにける

○御製

よきを取りあしきをすてゝ外つ國にちとらぬ國となすよしもかな

○御製

國を思ふ道に二つはなかりけり軍の庭に立つも立たぬも

○御製

山を抜く人の力も敷島の大和心を基なるべき

○御製

ますらをに旗をさづけて思ふかな日の本の名をかゞやかすべく

○御製

かぎりなき世に残さんと國の爲たふれし人の名をぞとゞむる

○御製

きたひたる劍の光いちじるく世にかゞやかせ我軍人

○御製

子等はみな軍の庭に出ではてゝ翁やひとり山田もるらむ

○御製

國の爲たふれし人を思ふにも思ふは親の心なりけり

○御製

國民の力の限りつくすこそ我日の本のかためなりけれ

○御製

ねざめにも思ひつるかな軍人向ひし方の便りいかにと

○御製

千早振る神の心にかなふらむ我國たみの盡すまことは

○皇后宮御歌

あやにしきとり重ねても思ふかな寒さおほはん袖もなき身を

○後宇多多天皇

時しあれば谷より出る鶯に世をたすくべき人を問はゞや

○後村上天皇

つかふべき人や残ると山深み松のとざしもなほぞたづねむ

○後奈良天皇

曇りなき天津日嗣をみづ垣のうけて久しき身に禱るかな

○龜山天皇

皇の神のみことをうけさつゝいやつぎくに世を思ふかな

○後宇多天皇

いとまた民安かれと祈るかな我身世にたつ春のはじめは

○後鳥羽天皇

夜をさむみねやのふすまのさゆるにもわらやの風を思ひこそすれ

○順徳天皇

三笠山峯の梢に陰なびく星の位はくもらざらなん

○後村上天皇

鳥の音に驚かされて曉のねざめしづかに世を思ふかな

○後鳥羽天皇

奥山のおどろが下もふみわけて道ある世ぞと人に知らせむ

○後村上天皇

位山こえても更に思ひ知れ神も光を添ふる世ぞとは

○伏見天皇

代々たえずつぎて久しく榮えなむ豊あし原の國やすくして

○後村上天皇

四方の海なみもをさまるしとて三の寶を身にぞ傳ふる

○後嵯峨天皇

久方の天より下す玉鉾の道ある國ぞいまの我國

○後柏原天皇

いかにせば月日を同じ心にて雲の上より世を照さなむ

○光嚴天皇

照り曇り寒き暑きも時として民に心の安む間もなし

○後醍醐天皇

世治まり民安かれと祈るこそ我身につきぬ思ひなりけれ

○天智天皇

秋の田の刈穂のいほのとまをあらみ我衣手は露にぬれつゝ

○伏見天皇

いたづらに安き我身を恥かしき苦しむ民の心思へば

○光嚴天皇

十年あまり世を助くべき名はふりて民をし救ふひとこともなし

祈る心わたくしにして岩清水濁り行く世を澄せとぞ思ふ

○後醍醐天皇

身にかへて思ふとだにも知せばや民の心の治めがたきを

○後嵯峨天皇

なかくに人より物を思ふかな世を思ふ身の心づくしは

○後鳥羽天皇

人もをし人もうらめしあぢきなく世を思ふ故に物思ふ身は

○後光嚴天皇

なほざりに思ふ故かと立かへり治まらぬ世を心にぞ問ふ

○花園天皇

蘆原やみだれし國のかぜをかへて民の草葉も今なびくなり

○光格天皇

敷島の 大和錦に織りてこそ唐紅も色にはえあれ

○光格天皇

葎生の茂りて道もわかぬ世にふるは涙のあめが下かな

○孝明天皇

戈とりてまもれ武夫九重のみはしの櫻風戦ぐなり
すまし井の水に我身は沈むともにごしはせじなよろづ國人

○皇太子殿下

降り積るまがきの竹の白雪によの寒けさを思ひこそすれ

○皇太子妃殿下

限りなきみ國の富やこもるらむ賤がかふこのまゆのうちにも

○常宮昌子内親王

出征の兵士を見て

勇み立つ益良丈夫を見るたびに恙なかれと祈りこそすれ

出征の將卒を思ひやりて

國のため勇む心は燃ゆるとも馴れぬ寒さに肌や凍らむ

旅順決死隊の行爲をききて

沈むべき舟に乗り居て雄々しくも港の口を塞ぎつるかな

陸軍の捷報をききて

御軍は勝わたりぬと聞くからにまづこそ思へ益良夫の身を
昨日まで露のおさるし城の上に旭の御旗今朝靡くらし

雪の降りける夜

白妙に深雪ふりつむからくにの野邊にふすらん人をしぞ思ふ

春の歌の中に

花鳥の色にも音にも何となく心とまらぬ春にもあるかな

祝捷會の提灯行列を見て

國民の喜び祝ふ諸聲は都大路になりひびきけり

○周宮房子内親王

出征の將卒を思ひやりて

浦やすの國をはなれていくさ人雪に伏すらむもろこしが原

紀元節の日に

御軍は日のもとづくに勝ちたりとみたまもそらにこそしめすらむ

旅順閉塞隊の行爲をききて

鬼神も泣きぬべきかな身をすてし舟を沈めしゝわがさゝては

陸軍の勝報を聞きて

陸のあたうちしほまれはさきつ日のふないくさにも劣らざりけり

祝捷會の提灯行列を見て

ともし火を手に携へて國民の御代祝ふ聲のいさましきかな

櫻を見て心に思ふことを

敷島の大和心のいさぎよき名に匂はなん山ざくら花

燕の軒に集くふな

みいくさのありとも知らで軒傳ひのどかに遊ぶつばくらめかな

夏のはじめに

冬よりもなほたえがたき夏は來ぬ身をいたはれよ益良夫の友

○閑院宮智恵子

日露戦争につきて

ふないくさかち續きたる御いくさはくがにもあたらうちや盡さむ

○山階宮常子

折にふれたる

朝夕に神に向ひてみいくさの勝つことをのみ祈るころかな

我君はいくさに出でくまごころのあたらかきりを盡しますすらむ

○久邇宮親子

廣瀬中佐の勇ましき戦死を明て

武夫のみちに散りにし櫻花いつの世までも香に匂ふらむ

身は舟と共に沈めて雄々しくもあたのみなとをふさぎつるかな

○賀陽宮好子

折にふれたる

御軍の戦ふごとに勝つ見れば神も出てや守りますらむ

いくさ人剣いよくとき磨きしこのしこ草かり盡してよ

旅順口陥落を待つ

今日もまた鈴の音きゝてかのみなとあらしゝらせを待ち渡るかな

雨中進軍

山みちにしのつく雨も物かはと進むみいくさ勇ましきかな

遼陽の占領を祝し奉りて

うちつゞき仇のとりてを攻取りていよゝかゞやく日の御旗かな

○伏見宮經子

折にふれたる

外國の海路はるかに響くらしわが御軍のかちどきの聲

○梨本宮伊都子

縋帶製造をなしつゝ

つゝとらぬ女ながらも國のためなしえむかぎり勉めてしかな

○北白川宮富子

赤十字社に縋帶をまきける時

白布に赤き心をまさこめてつなぎとめばや人の玉の緒

出征軍人を思ひやりて

いくさ人君がためとは云ひながらいかに寒さの身にはしむらむ

勝報をききて

勝軍しらする文を見るたびにまづはものゝ上をしぞ思ふ

○華頂宮郁子

折にふれたる

御軍のいさをあらはす武夫の強き心ぞ尊とかりける

○久邇宮篤子

水雷

四方の海に轟きにけりあたの舟うちくださつるいかづちの音

軍艦

日の本の國の守りの軍ぶね數そふ世こそ嬉しかりけれ

出征軍人の家族の心を思ひて

老らくの杖とたのみしひとり子も家思ふなといましめにけむ

後れじとくつばみそろへ乗り出す駒のあがきの勇ましきかな

旅順口陥落を待つ

かの港あたのまもりのかたくとも攻めいらん日は程やなかなむ

雨中進軍

雨降りて暗き夜半にも軍人あたのとりてに進み行くらむ

遼陽の占領を祝ひ奉りて

こゝぞとて仇の守りしとりてさへわが御軍の物となりなき

○和宮親子

○孝明天皇の妹宮親子内親王が徳川將軍家へ御降嫁の時の御詠

いとほしな君と民との爲ならば身は武藏野の露と消ゆとも

一 揺がぬ御國

○皇后宮御歌

かくばかり恵みあまねき大御代に生れあふこそ嬉しかりけれ

○ 高さ屋に登りて見れば烟立つ民のかまどは賑はひにけり

新古今集賀部に仁徳天皇御製とはあるが契仲の云へる如く此御製は上古のすがたではない、元慶六年日本紀竟宴に仁徳天皇の題で誰か詠たのであるか、延喜六年日本紀竟宴に藤原時平が仁徳天皇の題にて詠みし「たかどのに登りて見ればあめのかた、よもにけふりて今ぞとみぬる」より斯く改まつたるものであるか

仕ふるも心のいさむ御代にあひてかしこき君を仰ぐ諸人 左大辨賢房
千歳とも御代をばさし敷島や大和島根の動きなければ 源 俊 頼

皇の御代榮んと吾妻なるみちのく山に黄金花さく 大伴家持
 物皆はかはり行けどもあさつ神我大君の御代はとこしへ 本居宣長
 君が代はあまてる神の宮造り八百よろづ度あらたまる迄 贈大納言時信
 我君は千代に八千代にさぐれ石の巖となりて苔のむす迄 讀人不知
 君が代は天の羽衣まれにきて撫づともつきぬ巖なるらむ
 一方に靡さそろひて花すすき風吹く時も亂れざりけり 香川景樹
 古へに吹きかへすべき神風も知らでえみし等何騒ぐらむ 姉小路公知
 幾千代も守りはすてじ敷島の大和島根は神の國とて 前大納言公忠
 秋津しま神の治むる國なれば君静かにて民も安けし 源 仲 綱
 ちろかにも千代萬代と祈るかなこゝは常世の大和島根を 小澤蘆庵
 かぎりなき恵みを四方に敷島や大和島根は今さかゆなり 民部卿爲定
 千早振神の定めし國なれば古へよりも今ぞ榮えむ 讀人不知

あり出る高麗唐士の品はあれど大和錦にしくものぞなき 平 春 海
 畏くも照る日の本と名付ける曇らぬ君をあるじにはして 宗良親王
 天地の神やかためし萬代にたてゝうごかぬ國のみはしら 村田春海
 百千々の代にも動かじ天地の神のかためし大和島根は 同
 天地の開きそめぬる神代よりたえぬ日つぎの末ぞ久しき 前關白左大臣家平
 唐土の代々はうつれど敷島や大和島根は久しかりけり 土御門通親
 神代より三種クサの寶つたはりて豊あし原のしるしとぞなる 從一位教長
 神代より其名知られてわたつみの浪をさまれる浦安の國 内大臣實繼
 天てるや月日の影を見る國は本つ御國につかへざらめや 本居宣長
 世を守る千々の社の神しあれば何か亂れんあしはらの國 中納言長親
 我國は天照神の末なれば日の本としも云ふにぞありける 後京極政良經
 神代よりたえせぬ天つ日嗣とてげにくもりなき君は我君 源 成 直

千萬の國にまたなくすぐれたる稻の水穂の國は我國 本居太平
 八束穂の水穂の國と神代よりうべ著るくたへ來にけり 同
 天照す神の御末のさこしめす水穂の國ぞあやに尊き 同
 天なるや豊受姫の大神ぞ水穂國はまもりますらむ 同
 君が代は久しかるべき度會や五十鈴川の流れたえせて 大江匡房
 天が下しづけかる世にあへる身は更にみ山の奥も求めじ 加藤千蔭
 天の下常磐堅磐に治まれる我大君の御代は安御代 本居太平
 かしこさや天津日嗣は天地の常磐堅磐に御榮えませり 同
 玉ちはふ神の御代より御代かさね天つ日つぎと知食す君 同
 天照す日の太神の御勅にぞ天つ日つぎは定まれりける 同
 皇御孫の神のみことの受つがす天つ日嗣は動く世ぞなき 同
 萬代に現つ御神と生まして國しろしめす皇大君 同

三三

安見し我大君は神ながら受つがします天つ御位 同
 大海のしほひて山となるまで君は變らぬ君にましませ 西行法師
 天地の神のかためし御國とてをかしてはたる夷をもみず 左中將基綱
 草も木も我大君の國なればいづくか鬼の住家なるべき 紀朝雄
 君が代の久しかるべきためしには豫てぞうゑし住吉の松 一休和尚
 國民のひと心の堅ければ大和島根はゆるがざりけり 中川兵六
 もろ人の願ふ心のあふみなるやすらの里の安らけくして 輔親
 何事につけて恨みん愚かなる身も安國の教ある世を 枝直

○上杉家年始の祝膳に大根漬を大く一切にして付くるを例とするに或年小吏の誤り
 て大根を取落して膳を進めける時有司等之を罰せんとす公は硯引寄て(甲子夜話)

治れる御代の例しに香の物ひとされさへも忘られにけり 上杉鷹山公
 得手に帆を揚てを渡る四の海浪靜かなる御代を目あてに 讀人不知

三三

斯くばかり目出度見ゆる世の中を羨しくや覗く月影 蜀山人
 花薄箒木千里の武藏野は招かずとても民は止まる 同
 世の中は何時も月夜に米の飯さて又まうし金のほしさよ 同
 鐵砲は飾に持せさむらひのかくをはづさぬ御代を愛たき 橋太刀持
 鳳凰は夜着のもやうにあらはれて枕を高ういぬる君が代 小田手乘安
 太平にいらぬ矢竹もすなほにて例し少き御代のめでたき 敵龜坊

○大江戸の賑ひを

大江戸は外にたぐひもあらがぬの土一升ぞ金にまされる 雪木宿成
 君が代は弓も袋にをさまりてひくは霞と小松ばかりぞ 虎溪
 君が代や嗟氣味がよきみかよやあれ又幾世限知られず
 先以て御機嫌のよき君が代を恐れながらも祝ふめてたき 布留田造

○めでた百首の中に

あいた口戸さぬ御世のめでたさをお賞申すも憚りの關 蜀山人
 君が代は鎧もくさりかたびらも風の手をのみ通す蟲干
 甘い物食うて榮花に暇がない戸さぬ御世と云ふは此時
 幾千年動かですわる君が代はしびりも切れず葦原の國
 唐土はかきみやすらん萬代とふみのばしたるあし原の國 芳志
 治りて戸さぬ御代は皆人の言葉もかどをたてぬ愛たさ 水吉
 活計に腹のふくる世にあへば天下泰平國土安穩 未得
 とんとんと逢坂關ヶ原うち治めたる萬代の聲 志道軒

○白川公補佐の時何者か知らず

どこまでもかゆき所に手の届く徳ある君の孫の手なれば

○米高の狂歌(楓林庵草)

米高間一升二合をかゆにたき大岡食はれぬたつた越前

○殿中にて月見のありし時に白川公

四つの海波静かなる世の中はこよひの月の影にても知れ

五日を経て大嵐があつたから何者か次の如き狂歌を詠だ者があつた(鶴水隨筆)
四つの海つなみも高さ世の中を白川夜船夢で歌よむ

白雲の上も御國を不二の山
よるひ着て笑ふ時節や土用干

物外

天下和順、風雨以時
あめつちの間和らぐ春日かな

正定閣曇藏

日月清明、災病不起
かけひにも水の程よき青田かな

國豊民安、崇徳興仁

廣々と稻干してあり古戰場

兵戈無用、務修禮讓
御佛事や年貢餘りて茶の子餅

泰平を智者も勇者も知れる御代

甲冑に樟腦くさき大平さ
鳥來ねばいらぬ鳴子を御代の律

保護の靴音は寝て聞く春の雨
壓制は是さへ害どころらへる屁

可愛子に旅の御趣意を許す自治
歌集にもまさる議員の御勅撰

ニシキ
天銀
莊丸

三 愛國の精神(大和魂)

武夫の心思ほゆ大君のみことのさきを聞はたうとみ 大伴宿禰家持
 千萬の軍なりとも言舉せずとりて來ぬべき男子とぞ思ふ 高橋連蟲鷹
 思ひさや手もふれざりし梓弓あさふし我身馴む物とは 宗良親王
 取るまゝに猛き心も自ら振起さるゝ梓弓かな 平 春 庭
 武夫の矢なみつくろふ籠手の上に霰たばしる那須の篠原 右大臣實朝
 百敷やてる日の前にとる鉾のたつる心は神もしるらむ 權中納言定家
 二つなきことわりしらは武夫の仕ふる道はうらみ無らむ 源 持 資
 神垣に御代治まれと祈ること君に仕ふる誠なりけれ 祝部行氏
 あさむつゝ君を祈れば神垣に心かよはぬあかつきもなし 從二位隆基
 ふして思ひ起きて數ふる萬代は神ぞ知るらむ我君のため 素性法師

君を祈る心の色を人間はいたすの森のあけの玉垣 大僧正慈圓
 大君の勅かしてみいそにふりうのはらわたる父母あきて 丈部人麿
 筑波ねの此面彼面に蔭はあれど君がみ蔭にます蔭はなし 讀人不知
 武夫の上矢のかぶら一すぢに思ふ心は神ぞ知るらむ 菊地武時
 千萬の仇にむかひて走り猪のかへり見せぬを心ともがな 橘 千 蔭
 虎吼る國の境も物部の守るかぎりは安けかりけり 小野古道
 益良男は名をし立つべし後の世に聞つぐ人も語つぐかね 大伴家持
 劔大刀名をとめずば草木にも等しかるべき益良夫の伴 富士谷成章
 埋れぬ後の名さへも留ざらんなく此世暮なば 前大政大臣 良 經
 ともかくも我身一はなしつべし残らん名こそ後めたけれ 道命法師
 水上のすめるをうけて行水の末にもにぐる名をば流さじ 大江廣元
 假の世と此世を云はじ君と親と惠はいかゞ人にこたへむ 源 定 信

惜むとて今迄はよも永らへじ身を捨てこそ名は残りけれ 西行法師
屍をば岩屋のこけにうづみてぞ雲井の空に名を留むべき 高橋紹運
命より名こそ惜しけれ武士の道にかふべき道しなれば 森迫親王
名のために捨る命は惜からじ終にとまらぬ浮世と思へば 平塚爲廣
命をもかろきになして武夫の道より重き道あらめやは 源 致 雄
我君の命にかはる玉の緒を何いとふべき武夫の道 鳥井勝高
大日本神代ゆかけて傳へつる雄々しき道を撓みあらすな 賀茂季鷹
我心君を知るらむ代をいのる外には又も思ひなしとは 二品親王慈道
神垣に御代治れと祈るこそ君に仕ふるまことなりけれ 祝部行氏
君が代をいのる心の誠をばいつはりなしと神はうくらむ 從三位常昌
我君を千代に八千代に末かけて祈りおかまし伊勢の神垣 參議源治紀
武夫のとりつたへたる梓弓ひきては人のかへすものかは 平 景 高

君に起き民に伏しつゝ朝夕に仕むと思ふ身ぞおほけなき 太田道灌
砕ても玉と散るみはいさぎよし瓦と共に世にあらむより 眞木和泉
皇につかへまつれる我身ぞと思へばあだに花もながめじ 毛利敬親
吾が子ども君につかへむ爲ならで渡らましやは關の藤川 阿 佛 尼
思ひかね入りにし山をたちいでしまよふ浮世も只君の爲 藤原師賢

○天皇が「さして行く笠置の山を出しより天が下には隠れ家もなし」とあそばしければ

いかにせむ頼むかけとて立よればなほ袖ぬらす松の下露 藤原藤房
底ひなき千尋の海も何ならじ君がめぐみの深さ思へば 加地徳綱
今はたゞ涙になして包むかな袖にあまりし君が恵を 關白左大臣
うらやしく親に仕ふる身の幸も我大君の恵なりけり 碓井光業
敷島の 大和心を人間は 朝日に匂ふ山櫻花 本居宣長

韓國の城のへに立て大葉子はひれをふらすも倭へむきて 大葉子
 劍大刀いよとぐべし古ゆさやけくおひて來にし其名を 大伴家持
 武士の臣の男子は大君のまけのまに／＼さくとふものを 讀人不知
 山はさけ海はあせなん世なりとも君に二心我あらめやも 右大臣實朝
 君の爲世の爲何かをしからむすて／＼かひある命なりせば 中務親王
 有て身のかひやなからむ國の爲民の爲にと思ひなさずば 中務親王
 勅なれば身をばよせてき物部の八十氏川の瀬には立ねど 尊親王
 よしや身は土となるとも魂は御代の守りとならて止めや 工藤惟徳
 函館の關のふせりも心せよ浪のみよする御代にあらねば 水戸烈公
 敵あらばいて物見せむ鋒さを彌生なかばの眠さましに 同
 鞆の音聞えぬ國をあつさ弓心ゆるすな武士の伴 本居春庭
 をさまれる御代の守りの梓弓ひさなゆるべそ物部のみち 村田春海

事なくてありはつるだにうれしさに残すほまれを餘る幸 本居太平
 君の爲世の爲たてし忠わざの功を千代にほめざらめやは 同
 年重ね勵み勉めてつひにはた立ちし功のうれしからじや 同
 おのがまゝおひ茂りたる武藏野に我大君の道開かばや 千種有功
 君が代を思ふ心の一筋に我身ありとも思はざりけり 梅田雲濱

○元和三年八月二十六日後陽成天皇の崩御あり泉涌寺に葬事のありし時十五歳なる
 町人の女の詠し歌(玉露叢)

及びなき雲の上なるなげきをも天が下とてぬる／＼袖かな 中山忠光
 皇のみちしるき世をねがふかな我身は苦の下にふすとも 松本奎堂
 君がためいのち死にきと世の人に語りつぎてよ峯の松風 吉村寅太郎
 曇なき月を見るにも思ふかなあすは屍のうへに照るやと 伴林光平
 君が代はいはほと／＼もに動かねば碎けてかへれ沖津白浪

大君のためには何か惜からむ薩摩の瀬戸に身は沈むとも
 天津風ふけや錦の旗の手になびかぬ草はあらじとぞ思ふ
 かねてより思ひをめてし真心を今日大君に告てうれしき
 君がため盡せやつくせ己が身の命一つをなきものにして
 天地のひらけそめぬる神代よりたえぬ日繼の未ぞ久しき
 大君はいかにますぞとあふぎ見れば高天原に霞こめたる
 大君の大御心をさよとだに東風吹く風に我に知らせよ
 玉の緒の光消えなば人知らず君の守りとならましものを
 玉の緒は浮世の塵と消えぬ共君に知られば嬉しかるべし
 わが罪は君が代思ふ真心の深からざりしるしなるらむ
 敷島の錦のみはた持さくげ皇いくさのささがけやせん
 西の海東の空とかはれども心は同じ君が代のため

僧 月 照
 平野國臣
 藤田小四郎
 國司信濃
前關白左大臣宗平
 三條實美
 東久世通禧
 四條隆謨
 壬生基修
 頼 山 陽
 佐野竹之助
 清水寺信海

民やすく國治まれといのるかな人の人より我君のため
 民安く國ゆたかなる御代なれば君を千年と誰かいふらむ
 老の身のはつる命は惜しからで世に功の無さどかなしき
 身はたとひ武藏の野邊にくちぬともとどめ置まし大和魂
 唐土も天の下にてありと聞く照る日の本を忘れざらなむ
 君の爲國の爲とし思はずば雪や螢を何かあつめん
 君が代に千代を籠めたる一ふしの竹豊かなる秋に生れて
 七度も生き還りつゝをびすをばはらはん心われ忘れめや
 夜よしも見えぬなかばの秋の月都の空は澄やすまずや
 我ために君を思ふぞ口をしや君の爲にと君をば思はて

二品法親王 深勝
 一條内大臣
 佐久間象山
 吉田松蔭
 成尋ノ母
 蒲生君平
 豊竹蛙井
 吉田松蔭
 島津久光

今上梅壺におはしましし時薪こらせて奉りたまひける(後撰集)
 山人のこれる薪は君がため多くの年を積んとぞ思ふ

ながらへて花をまつべき身ならねど尙惜まるゝ年の暮哉 大石良雄
國民の君に仕ふる道はたゞわざいぞしむの外なかるらむ 中川兵六
行末を思ひまはせばをだまさのいとあはれなる大和撫子 高野長英
我を我と思ぼしめすかや皇の玉の御聲のかゝるうれしさ 高山正之

(皇后宮の御歌に、高山彦九郎を憶ふ「ながらへて今世にあらば高山の高きいさを
なたてましものをし」)

浮雲のかゝるもよしや武夫のやまと心の數に入りなば 野村望東

○清水長左衛門生善の時辭世に

惜まるゝ時散りてこそ花なれや人も人なり花も花なり

○勤王の士大橋順三の妻卷子は、夫と共に有志の間を奔走した女丈夫である。

空翔るたまのゆくへや九重の御階の下のあたりなるらむ 卷子
よしやよし世を去るとても我心御國の爲になほ盡さばや 國司信濃

たが身にもありとはしらす惑ふめり神のかたみの大和魂 野村望東
露雫かゝる所へ君を置きて袖しぼり行く樹々の村雨 成島道筑
世の中の限りは更になけれども君が齡の桃の花咲く 赤井圖書
大君のまけのまに／＼一筋につかへまつらむ命死ぬとも 三條實美
梓弓昔をひくも武夫のみちはまことにたけかれとのみ 齋藤拙堂
弓矢とる身にはあらねど皇につくす心は人におとらじ 長尾武雄
君がため赤き心を顯はしてもみぢと散れや大丈夫の友 中山忠光
人はよし如何に云ふとも開けゆく世の魁は我どなしけむ 松平慶永

○楠正成の作と傳へらる

身の爲に君を思へば二心君の爲には身をも思はじ

ある人楠公を詠める「七度と誓ひし君が言葉には花も咲きけり實も結びけり」

櫻田の花とかばねはさらすともなどたゆむべき大和魂 佐野竹之助

君がため盡す心は武藏野の野邊の草葉の露となるとも 有村治左衛門
 近江の海磯うつ浪のいくたびか御代に心をくださつる哉 井伊直弼
 大船の思ひたのみてわが君と仕ふる君の御かげ尊し 本居太平
 畏さや君の御代々々代々を経て被る御かげな忘れそ子等 同
 國の爲ひとやのうちに沈むとも我たまひしは君を守らむ 高杉晋作
 上衣キヌはさもあらばあれ敷島の太和錦を心にぞ着る 西郷隆盛
 二つなき生命の限り君のためつくす誠の面影どする 野津鎮雄
 何國にも君住むかたを枕にて跡にはなさぬ都なりけり
 ととも世に残るとならば久方の天つ空まで満つる譽を
 いや高さ君が恵にくらぶれば塵ひぢなれや雪の富士の峯
 移行く世々は經ぬれど朽もせぬ名のみ流れて尙聞えけれ

鶏

昔のむす千代に八千代に太平の時を謠うて遊ぶにはとり
 鶏もひよこに道をつぐるとやこのつか孝行く
 雀さへ忠々々となくものをなどますらをの忘るべきかは 松本奎堂

○佐藤繼信の石碑に向て一禪僧の手向の歌に

あはれなり君の命をつぐ信がしるしの石はこけ衣着て

石碑の中より返歌

惜むともよも今迄は長らへじ身を捨ててこそ名をば繼信
 大刀とるも鋤鋏とるも君がためうつもかへすも武夫の道 田宮如雲

○八郎は文久二年義兵を擧げしが志をとげずして戦死す。

議論より實を行へなまけ武士國の大事を餘所にみる馬鹿 南 八郎
 上からに慈ナサケの蓋をするときは下はすなほにうけて治まる

○主有愛僕有忠心、親有慈子有孝心、兄有憐弟有敬仕、夫有實婦有貞心の心を

主従は骨と紙ぞと思ひあふ時はうちわが丸うをさまる
あふぐべし我身の上の熱さより君と親との恩のあつさを

何のその思ひ残さず春の雪
降る雪や破れ鎧のそでのうへ

大關和三郎
國分新太郎

○明治三十七年三月二十七日第二回旅順閉塞の時廣瀬中佐は福井丸に乗るとて
「七生報國、一死心堅、再期成功、含笑上船」

一片の肉が動かす五千萬
軍隊へ勅諭孫吳が秘書にまじし
忠の字は口と心へ釘をさし

齊 家

一 家庭の和樂

わびぬれど我宿なれば歸るなり心やすさを思ひ出して
世の中に左もたのもしく見えぬるは思ひ合たる一家親類 荒木田守武

樂しみは春は櫻に秋は月家内中よく三度食ふ飯
家内中なか悪しければ地獄なり中がよけれ何時も極樂
家内中なかのよいのが神あそびたかまの原にひびく鈴音
家内中なかのよいのが寶船心やすく世を渡るなり

もちやつかぬ家は餅つく年の暮もちやつく家は餅搗ぬ也 蜀山人

おかめから見てもにこ／＼暮すのは家内の祈禱大神樂也

我心だけの長者を家中和合

子福者の毎夜寐床の境論

未の子は隣に居るぞ種瓢

附録(無邪氣なる小兒)

○御製

思ふこと思ふがまゝに云ひ出るをさな心や眞なるらむ

○御製

御題子

思ふ事つくろふ事もまた知らぬをさな心の美しきかな

羨まし憂きよりなりて淨身とも思はず常に笑める嬰兒 小澤蘆庵

笹の葉を小舟に造りうなる子が心たらひの水遊びせり 加納諸平

陸まかに云ふかとするれば腹たちていさち争ふ子等が遊は 本居太平

五月蠅なす騒ぎ呼はり立走りうらなく遊ぶ子等し美し 同

打笑ふ心のまゝにふるまひてさかしらせぬは子等が眞心 同

餅搗がとなりへ來たと云ふ子かな 一 茶

初袷袖口見せに裏家まで 筒

書ちんの蜜柑見い／＼吉書かな 筒

春雨や猫に踊りを教へる子 筒

柿の木であいと答へる小僧かな
稚子の引ずつて行く小紙鳶かな
巡査見えて裸子逃げる青田かな
小兒醫者匙を取られて手を重ね
隣の子もらが内でも鱒だよ
小供客食ふ程食ふとちさらばよ
葬式の供を離れて蟬を取り
叩かれず寐た子の顔の蚊の悪くさ
まゝの子が一つ團扇の修復かな

四四

同 麥 子

圃 規

二 家庭の教育

○御製 御題 庭訓
たらちねの庭の教はせばけれど廣き世にたつ基とはなれ

垂乳根の道の知べの跡なくば何につけてか世に傳へまし 大納言爲家
三度まで隣をかへて住みけるも我子を思ふ故とこそ聞け 齋藤義夫
打ち給ふ教の杖に助けられ直ぐなる道に行くぞうれしき

首がせといへど我子は善智識直ぐなる道へ連れて歸れる
嬰兒は手鹽にかけて守立よかうくあらばさいはなく共 手柄岡持
横さまに這うて教へた蟹の子に直に這へとは無理な親哉
芋を見よ子に榮えよと親瘦せてゑぐう成たり甘う成たり
親は過去我身は現世子は未來後生大事と子をば育てよ

樂として稚育ちをする人は老て貧苦の種と知るべし 大燈國師

そへ木して直ぐに育てよ稚櫻 貞 徳

花清し人も蓮の育ちかな 同

芽出しから人さす草はなかりけり 一 希 因

つとめよと親もあたらぬ炬燵かな 嵐 雪

短慮功あり誠めに断た機

笑はれぬ爲に泣かせる親の恩

母の情叱つて寝せた子を覗き

可愛子に灸は蘇鉄の肥に釘

三 親 心

○和泉式部は其子小式部に後れて倅しく暮して居るうち上東門院より賜はりたる衣に小式部の内侍と札に書付あるを見て

諸共に昔の下には朽ちずして埋れぬ名をば見るぞ悲しき 和泉式部

また小式部の内侍の娘のあるを見て(桐火鉢)

留め置さて誰を哀と思ふらむ子は勝るらむ子は勝りけり

○鎌倉にありて老母に厚く事へて居たりしが京都に赴くとて

月出ては東の空をながむべしかたむかばまた思へ都を 左衛門尉某

母の返歌に

やみなれば思ひたえなん都人月なき時も我は忘れず

○永く宮仕へせし娘が一朝君の逆鱗にふれて遠島の刑に處せらるゝ時別れを悲しみ
て(本朝語園)

この世にて長き別れを今ぞしるをくれ先立つ習ならても 中納言通勝
悲しさを誰に問はまし子を思ふ親の心は親ぞ知りける
分け出でし跡だに残せ落積る木の葉淋しき庭の夕風

其後幾年かを過て後大覺寺殿にて和歌の會がありし時浦船との題て詠れた歌にな
ほ子を思ふ情が顯はれて居る。

あら磯の便も浪の捨小舟心ある海人のつてをさかばや 相 摸
何事も心にあらぬ身なれどもこの寶こそ先はほしけれ 紀 貫 之
世の中に思ひあれども子をこふる思ひに勝る思ひなき哉 左大辨雅頼
子を思ふ道にそいのる皇に仕ふるあとをたかへざらなむ 前大納 基良
たらちねの心の闇を知るものは子を思ふ時の涙なりけり 源 有 長
知るらめや子を思ふ闇の夜の鶴我世ふけ行霜になくとは 中納言兼輔
人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に迷ひぬるかな

我爲に着よと思ひし藤衣身にかへてこそかなしかりけれ 赤染衛門
先立たぬ命ぞつらき永らへてこの別れにもあふと思へば 林 永 善
思ひきや残るかひなき老鶴の子を先立てねになかむとは
集めよといさめし窓の螢さへ今はこがるし思ひなりけり
思ひきや六十餘りの坂こえてこの別路にまよふべしとは 大炊衛門
さもこそは人に劣れる我ならめ己が子にさへ後れぬる哉 前内大臣母
しぐれより尙定めなくふるものは後るし親の涙なりけり 源 重 之
恨しないかなる世より親に子の先立つ道の有をめぬらむ 宗良親王
黒髪も長かれとのみかさなでしなど玉の緒の短かりけむ 豊後勝俊

○道眞公の元服の時其出世を祈りて詠れたる歌

久方の月のかつらもをるばかり家の風をも吹せてしかな 道眞の母

○平群廣成といふ人、天平四年に遣唐使として彼の國に渡らんとする時、其母千里

が見送りて詠る歌。

旅人のやどりせむ世に霜ふらば我兒はごくめ天の鶴むら 千 里

○業平朝臣が兄行平と共に心をくだきで朝廷に仕へまつり母なる伊豆内親王に無沙汰かちなりければ。

老ぬればさらぬ別れのありといへば愈見まほしき君哉 伊豆内親王

業平之を聞て直に行き母を慰めて。

世の中にさらぬ別れの無もかな千代もと祈る人の子の爲

○子^{タカチカ}擧周が病重く一命危かりし時住吉の神社に七日間參籠して我子の生命助からば代りに我生命召したまへと祈りて。

伏らむと祈る命は惜しからせても別れむことを悲しき 赤染衛門

これとても假初ならぬ別れてはかたみども見よ水^{ウミ}莖の跡 一休の母

○我子の仕官を御堂殿願ひて。

思へ君頭の雪を打ち拂ひ消えぬ先きにと急ぐ心を 赤染衛門

○阿佛尼が慈判を仰ぐ爲に鎌倉に出る一條は眞に親子の情の濃やかなる所が顯はれ居る其後(十六夜日記)

つくづくと物な思ひを戀しくば道遠ぐとも早かへりこむ

○聖武天皇の時佐野近世なるもの、妻其繼子を嫉みて漁夫の衣を盗んだと告たのを元來短氣なる近世は直に其女を殺した翌年父の夢に顯はれて二首の歌を詠だ近世はかなしみ妻を追出して出家したと云ふ(和漢三才圖會)

ぬきしせる其たばかりの濡衣は長さなき名の例なりけり 近世ノ女

ぬれ衣の袖より傳ふ涙こそなき名を流すためじなりけれ 同

世の中は我こそ人にあらずとも人になしたき子の行へ哉 荒木田守武

昔今高き賤じき人の親の子を思ふ心ことならめやは 本居太平

賢じきも愚なる子もとりづくに我子とし云へば同じ悲さ 同

嘆かる身よりも嘆く老の身を嘆きこそすれ嘆る身は 高野長英

○子を失ひし時に

眺ても此世の空と思はぬは子に別れたる朝にぞありける 香川景樹

(頼山陽が娘を失ひし時に「別春亦別兒、此日兩傷悲、春去有來日、兒逝無

會期)

撫子に憐れならぬはなかりけり後れ先立つ花はあれども 佐々木丈雄
親となり子となることも今ならず二世も三世も盡ぬ契ぞ 一休和尚

○父母五種の恩(僧經)

亂さめや頭の髪の一筋も親よりうけし物と思へば(骨肉接與恩)
生の子を手にかけてこそ足乳根の深き恵も思ひしらるれ(養育無比恩)
人なみに身のおひたつは朝夕に親の守りのあればなり(愛護護持恩)
子を思ふ親の誠をたのみつゝ身のなりはひを忘るなよ夢(産業指南恩)
身をつみてためし寶の數々も譲るは親の恵みなりけり(財物附屬恩)

○父母の恩重經の十恩

たゞ暫露を宿せる草の葉もあきふしやすき物とかは知る(懷胎守護恩)
生死の海の波間を分けてこそこの白玉はかづきあげしか(臨産受苦恩)
うぐひすの谷の戸出る一聲にこそこの寒さは忘れはてつゝ(生子忘憂恩)
山がらす軒の雀も朝夕におのが爲にはあさらぬものを(嚙苦吐甘恩)
思ひ子の濡るを惜み床の海に我身は浮てぬぬ夜半もなし(回乾就濕恩)
足乳根のほそちにかけて繫ずば玉の小琴はねも絶なまし(乳哺養育恩)
子の爲に洗ふ筒井の暇なみ筒井のもとに立ぬ日もなし(洗濯不淨恩)
峰續き花より花に遊びけりまつらん親の心しらずて(遠行憶念恩)
子を思ふ闇こそやがて後の世の暗さに迷ふ知べなりけれ(爲造惡業恩)
世を救ふみよの佛の心にも似たるは親の心なりけり(究竟憐愍恩)
憐れなり焼野の雉子立かねてなほ子を思ふ道柴の露

父上よけふは如何と手を突て問子を見れば死なれざり鳥 落合直文
明らけき月の夜にも子を思ふ心の闇の鶴はなくななり

○或人子を捨るとて

身に勝るもの無りけり縁子はやるかたもなく悲けれども
奥山にしをるしをりは誰が爲ぞ我身をすてし歸る子の爲

餌を運ぶ親の情の羽音には目もあかぬ子も口をあくなり 二宮尊徳
はへばたて立てば歩めの親心我によりくる年は忘れて

無袖を我子に振らす染浴衣おどりは親のむねにこそあれ
子を思ふ親の重荷の四手駕籠じばしも休む息杖はなし
垂乳根の母の餘にめぐる子は善らぬ人になるとこそ聞け
母の乳父のすねこそ戀しけれ遊んで食ふ事のならぬば

○畫師戀川春町又の名は酒上不埒といふ人妻なめとりしが兩親の氣に入らぬより子
のあるに離縁する事となり其のち後妻を迎へてはとすゝめる者ありければ。

思子にはえこぢるとも繼母の手鍋にかけずだき守立てん

友人の一人が之を聞て

まゝ事の膳にも近き嬰兒のかいとほ云じとくのよければ
數もなき子を賣る人のありと聞く親ではなうて鬼の再來
昔わが合點せざりしあたまをば孫にはらるゝ今の嬉しさ 權柄見鷹
親父殿金をのばすに子はつかふ弟は別ける一家ほじがる

一〇浪花五人男の畫に

此様な息子を持た親たちは夜の目もあはて氣苦勞に有ふ
どごと一つ取所なじと人は云へど杖はしらとも思ふ子の親
ッを鳥渡此方へ向けば眞直になると思ふが親の慈悲心

食飲をせずになめたる金銀を子になくされる親は馬鹿者
みどり子の片身に残す風車うらみながらも廻してや見む

○清澄の子のなくなりける時友のよみてつかはしける
兒におくれたまひし君をとはんにもやはり先立つ我涙哉

文月や一人はほしき娘の子

○亡妻新盆

かたみ子や母が來るとして手をたたく
子もふまず枕もふまず時鳥
子やなかん其子の母も蚊のくはん
子を持たばいくつなるべき年の暮
とんぼつり今日はどこまで行たやら

其
角

一
茶

其
角

千
女

こゝかしこ親鳥の鳴く焼野かな
稻妻やなく子をすかす親心
はなれ鶺鴒が子のなく舟にもどりけり
母の手で仕立てし着よき袷かな
よくねればねるとてのぞく親心
早乙女や子の泣く方へ植て行く
親骨の力で動く扇かな

井上土期は名古屋の露である、愛子が痘瘡に果てたるを歎きて

露の世は露の世ながらさりながら
子を寝せて火宅の門の涼みかな
涼風の吹く木へしばる我子かな

湛遊一
熊路茶續

士珪
郎琳

ひろはるゝ闇から親は手を合せ
出てうせうせう汝元來蜜柑箱
母親の異見拜むか言ひもさめ
母親はもつたないがたましよい
母親のなまけはどらの元手なり
子を持ってやうゝ親の馬鹿が知れ
子を以て知るとは遅い思ひつき
ぶつまねは握りこぶした息をかけ
雷をまねて腹がけやツとさせ
夜の雪不孝者めが居り所
すねた子を壁からやつとひつべがし
勤當の子より巨燧の親はやせ

今捨る子に有だけの乳を吞せ
朝顔に起ならはせた親の恩
鐘太鼓聲の枯れたが親そふな
乳を嚙むを叱りながらも齒を數へ
太鼓まで連れた迷子に母こまり
つめられた息子に痛む母の腹
子を持って近所の犬の名を覚え
泣て居る棄兒の身にも灸のあと
ふり上る親のこぶしは案山子の矢

四子心(孝)

○御製

上つ代の御代のちきてを違へじと思ふぞ己が願なりける

○御製 御題 子

たらちねの親の教を守る子は學びの道もまどはざるらむ

人の子の親になりてぞ我親の思ひはいとゞ思ひしらるゝ 康資王母
 子を思ふ道にまよひて今ぞしるちゝぶの山の深き恵みを 小澤蘆庵
 みなし子の類多かる世なれども只我のみと思ひしられて 慈鎮和尚
 還ては先垂乳根を見しものを今日は誰にか逢んとすらむ 源 道 濟
 垂乳根のあらばあるべき齡ぞと思ふにつけて猶も戀しき 從二位能清
 垂乳根のありていさめし言葉は無跡にこそ思ひしられる 前大納言爲氏
 傳へきく言葉にこそ残りけれ親のいさめし道しばの露 丹後長有

在し世の親の諫めし儘ならば悔しく身をば歎かざらまし 前大納言爲氏
 ほろくくと鳴く山鳥の聲聞ば父かと思ふ母かと思ふ 行 基 菩 薩
 霜ぞおく夜半に捨子の泣やむは母に添寝の夢や見るらむ 爲 村
 家富みてあかぬことなく仕ふとも報いんものか親の恵は 小澤蘆庵
 おほし立し親なかりせばいかにして君の恵を我は受べき 平 景 隆
 人の子の親になりてぞ我親の思はいとゞ思ひしらるゝ 康資平母
 ○中將姫は藤原豊成の三女であるが繼母の邪見なる心より朝夕に身の苦しみをうら
 みず子たるの本分を盡した人である、此歌は母の墓に詣て、詠めるものである
 稀に來てとふも淋しき松風をつねにや苔の下にさくらむ 中 將 姫
 ○橋の逸勢ハヤナリが伊豆に流さるゝや其女妙仲は悲みしにたへず一人くだりて父を訪ふ、
 父の罪は没して後に赦されたが妙仲は十年めに都に返りて父の墓を修めて祭りを
 した孝女である
 苔の衣雪げの水にすゝぎても袂ゆたかにひるひまどなき 妙 仲

○平宗盛の侍女熊野は東海道池田宿の商家の女である、ある年母の病氣看護のため暇を乞ひしに許されざりければ、心にもあらぬ花見の供せし折宗盛の命により舞ひつゝ此歌をよみ出て其場に於て歸國の許を得た

いかにせむ都の花も惜しけれどなれし吾妻の花や散る覽 熊野

○病氣重くなりて死んとするとき母の和泉式部が看護せる顔を見まもりながら

如何にせむ生べき方もおもほへず親に先立道を知らねば 小式部

○日吉の神主成仲の女の歌に

君が爲いと命の惜き哉かゝる憂き目を見せじと思へば 千枝

○若狭は種子が島時堯トキガカの女である、天文十二年八月父母に遠くはなれたる時に

月も日も大和のかたど懐しき我が兩親のありと思へば 若狭
惜からぬ身ぞ惜まるゝ垂乳根の親の残せる片身と思へば 元政
たらちねの老の數のみいとはれて我身を知らぬ年の暮哉 賀茂久世
やゝ積る我身の年を思ふにもまづたらちねの老を悲しき 鶴若丸

忘らんと野ゆき山ゆきわれくれど我父母は忘れせぬかも 商長麻呂
なくくも別れし時を別れにて別るゝ親のなきぞ悲しき 賀茂真淵
墨染の袖をぞしぼるたらちねの在ましかばと思ひ續けて 前大僧正慈鎮
教へ置く其言の葉を見る度に又とふかたのなきぞ悲しき 前大納言實之
嬉くも老ぬればこそ垂乳根の五十年の御靈けふ祭りけれ 橘枝直
たらちめはかゝれとしてしも闇玉の我黒髪を撫ずや有けむ 僧正遍昭
父母は茲にいまその増鏡恵みの影をうつす此身を 松平定信
子を思ふ心の道の心もて親につかへよ世の中の人 三浦正道
國を思ふ心の深き子ならずば親にも淺き心ならまし 税所敦子
たらちねの親のみ思ふ緑子の心や人の真なるらむ 右大臣義政
愚なる身を思ふにもたらちねの親の諫を戀ひぬ日はなし 山上臆良
出行し日を數へつゝ今日くゝと明日を待つ覽父母らはも

○成經俊寛等と共に鬼界が島に流されて居ること三年京にある老母を思ひて一千の卒都婆を作り歌を記して流した、此の一角浪に漂うて終に京に達し赦免せられた

(本朝語園)

思ひやれ暫しと思ふ旅だにも猶故郷は戀しきものを 平康頼
薩摩濁沖の小島に我ありと親にはつげよ八重の汐風

○徳川八代將軍の薨去の後其子宗武は父なる將軍より受たる桃櫻の盃を出して早や三年忌になれりと歎にたへずして

桃櫻見るに心はなぐさまで三年をすぞす君ぞ戀しき 田安宗武
代々の祖のみかけ忘るなよしの祖は己が氏神己が家の神 本居宜長
父母はわが家の神わが神と心つくしていつけ人の子 同
玉襟かけて祈らむ世々の祖親のみちやの神のちはひを 平田篤胤
いざ子供さかしら止てあら人の神に倣ひて親をいつかな 同
限りあればけふぬぎすてつ藤衣はてなきものは涙なり鼻 藤原道信

かゝる時我身と知らば惜からむ親の枝葉と思ひ知らずば
子に迷ふ親の心を見るにつけ我がぞいろも斯やありなん

○恒良親王が父帝の流されたまへる時八才にして詠みたまひし歌

つくづくと思ひ暮して入相の鍾をさくにも君ぞこひしき
姥捨の山には入らじ名をさきて車かへし人もありしを 通

○文祿三年秀吉公母堂三回忌に高野にて(校書餘録)

なき人の形見の髪を手にくれてつゝむに餘る涙かなしも 豊臣秀吉
夜の鶴の心もあれど鴉てふ鳥しも親を思ふあはれさ 武者小路實隆
世の中の親に孝ある人はたゞ何につけてもたのもしき哉 荒木田守武
ほろくとなく山鳥の聲聞ば父かと思ふ母かと思ふ 傳教大師
面かげは千代に傳へて父母のありし教を思ひはなつな 慈雲尊者
榮えよと我子を思ふ今の身の別れし親の昔しをぞ思ふ

梓弓やたけ心の武夫も親にこがれて迷ふ死出かな 渡邊華山
麻繩にかゝる身よりも子を思ふ親の心をとくよしもがな 同

〔「不忠不孝」と自ら名のりたる華山にて尙かつ然り〕

親を思ふ心にまざる親心今日の音づれ何とさくらむ 吉田松蔭
高き身も賤しき人も親思ひたれか忘れむあした夕に 本居太平
限りなき親の恵みは己が身の老て後しもましておもほゆ 同

○母の墓に詣て、石碑に手向んとする水に我影のうつれるを見て

阿伽桶の水に寫れる我影は世になき母のかたみとぞ見る 蜀山人娘
たらちねの母のまさばと位山登るにつけて思ひいづらむ 高崎正風
たらちねの母のみ思ふ縁子の心や人のまことなるらむ 税所篤子
御手の下打るゝよりも打つ父の御心こそは痛みますらめ 奥野昌綱

身一つは左もあらばあれ垂乳根の老にはつらき年の暮哉

芳澤あやめ

道知らぬ名も行春の親知らず子を知らぬ里に迷ひ疲れて
親は膚君の御恩はからごろもかへすゝもありがたき哉
孝行の心を天も水にせず酒と汲する養老の瀧
忠孝の二の道は平生に人の上こそす様につとめよ
忠孝の守を常にはなさずばいかな悪魔もよりつかぬなり
氏よりも育てからとて親々を譽さずこそ子の手柄なれ
親は少し左りまへなる事ありとたゞ孝行にするが子の道
親よりも物知り顔にかたひぢをはるは誠に手に餘るもの
親と子は次第おくりと知るならば次第送りに孝行をせよ
恵みある主親拜みて後の事神も佛も第二第三

無二膏や萬能膏の奇特より親孝行は何につけても
 主へ忠親へは孝の小槌よりよろづの寶打出すなり
 垂乳根の我をよかれと打杖は撫て摩らるゝ心地してまじ
 孝行は命のうちに盡せかし疑はしくば請取を取れ
 撫さすり大事にするも埋火の冷たうならぬ内てこそあれ
 親に離れ後悔するは常の事かしこき人は早う氣がつく

○桶屋の親子の喧嘩を仲裁したる歌

木に竹の無理を云ふ共そこが親云せておけやたが笑ふ共
 孝行を肌身心に放さずばいづこへいても怪我はあるまじ
 賜はりし身に傷つけてすむものか親へ對して何と言わけ
 たねごもり命をかけて養はれ長の御苦勞云ふもおそろし
 夏はあふぎ冬は蒲團を暖ためて身には着ずとも親を養へ

何時までも親の目からは子供なり子供心になるが孝行
 何事も親の心にかのへさるこれかうしんの人と云ふなり
 親と子は生のまゝの孝行と知ること人のもことなりけり
 淺ましや子の行末はかなしめど親の行末思ふ子はなし
 日に三度膳に向はゞ父母や主の御恩を深く味へ
 父母の目をぬすみたる其報ひ身の跡先も見えぬくらやみ
 子を思ふ親ほど親を思へたゞ孝だにたてば忠も身もたつ
 譯もなく打るゝとても親の事杖の下にもことわりを云へ
 今のみと思ひて親に仕へよや定めなき世に後は知れぬぞ
 天は心即ち父のかたみなり身は地にして母のかたみぞ
 天と地父母の外我はなし我をでかせば不孝とぞなる
 父母にまかせて事ふまつれかし天地の外我はなきなり

七〇
天 廣 九
拔る齒に今思ひ出てくちをしや噛でふくめし親の異見も
誰もみな此身は地の形身なり傷をつけなよ己が此身に
誰もなみ鏡は天の形身なり恥かしめなよ己が心に
澁かりし親の異見も枝柿の子をもちてこそ甘味をば知る
朝夕に主と親とを拜めたゞ神も佛も其上のこと
橋 州

○女乞食の歌に

門に立ちて物乞ふ爲と玉琴を我たらちねは教へざりしを

〔藝が身を助ける様な不仕合〕また曰く「藝が身を助けぬ様な不仕合」

おとなしく親に孝ある兒子の其行末を樂しかりける

〔幼少父母有孝心、中年主君有忠心。老避世求作善意、生涯慈悲有誠心。〕

あだに身を思ひ亂すな黒髪の一筋とても親の形身を
孝行の心一つで天地も人も我身も丸う治まる

○昔し信州上田の農民に年の買物を未進せし躰にて入牢せし者があつた、十七歳なる娘が願ひ出て、去年の秋大風田畑を荒し、元より朝夕の煙もたえくゝなる老の身の如何にせん様もなく國法に反ける事なれば我も父と共に牢内に入れたまへと泣くく一首の歌を奉つた

我も共にとく吹散せ葛の葉の恨みは去年の秋にこそあれ

國君聞きたまひて父の罪を赦し、娘に白銀をたまふた(心學心得草)

○大和國宇陀郡拾生村孝子平三郎は毎朝手水にて父母の面影を拜みて詠める(あつめ草)

よごれたる身を清むるは水の徳水神さまの恵みなりけり 平 三 郎
水鏡うつる我かほ直ぐに親神と佛のこれが明德 同
ありがたや静かに使ふ手水場で父母の面影拜むうれしさ 同
眞似にせよ主人に忠義親に孝ひた者すれば本眞にぞなる

○二十四孝の歌

心あれば心ありてぞかけて來る鳥獸も秋のたのみを大舜

いと高き身をも忘れてみ心を親のなやみに盡すかしてさ(文帝)
 寒さをも寒しと知らずはそ葉の陰を慕ひて幾年かへし(関損)
 行さきに母の心のかよひてや薪こる間もむねやさわぎし(曾參)
 よねおひし業斗りかは親を思ふ名さへ幾世に重く傳へし(仲由)
 時の間に五百機おらす乙女子に會ひしも親の惠なるらん(董永)
 親の爲しかと云ずば荒ちをのかるやの先はいかて免れん(剡子)
 淺からぬ心に拾ふ木の實をば風もよそにはさはざり梟(江華)
 橘の實をもちかへる袖よりも親思ふ名の香ぐはしきかな(陸績)
 報ひけん人ぞ尊きはぐみし親にもあらぬ親のちぶさに(唐夫人)
 心なき蚊だにもよけよ夜もすがら親に仕ふる人の邊は(吳猛)
 親を思ふ心の程の厚氷とけてや出るあはれ其鯉(王祥)
 黄金にも光りましけりみどり子を埋めんとまで思ふ心は(郭巨)

人の子の親を思へる真心はあらき虎をもなびかしにけり(揚香)
 時しあれば身に傷つけて祈るとも猶此道を神やうくらむ(朱壽昌)
 旅衣痛くもむねのはしらすははしりかへりて親に仕へし(庚點妻)
 衣手に沖津白浪かゝりしも拾ふこのみのさちにやはある(蔡順)
 おされても老をかくして老に老し親の心を取ぞかしこき(老萊子)
 たらちねの夢や覺るとよもすがらあふぐ扇も鳴さゞり梟(黃香)
 垂乳根に仕へまつれる江の水も鱗ふる鯉も神のなすらむ(姜詩)
 亡魂をふかくしたひし其名こそなるかみよりも轟きに梟(王裒)
 生る日に猶なすらへて仕へしは一方にやは思ひなしける(丁蘭)
 雪深き竹の林の竹の子や親を思ふ子の心知りけん(孟宗)
 朝夕にひすます人もあるべきを親の爲には自らぞせし(黃庭堅)

父母の頻りに戀し雉子の聲
行年や又親達に遠ざかる
行年や親に白髪をかくしけり
靈柩の奥なつかしや親の顔
親の植ゑし松を見て寐る子の目かな
寢心や炬燵蒲團のさめぬ内
母親の寢冷氣遣ふ夜寒かな
元日や何はなくとも親二人
叱られて見たや涙の袖時雨
和らかにたけよことしの手作麥
目がさめて眠つた顔を思ひ出し

七四
芭 一 越 去 鷹 其 紅
蕉 具 人 來 山 角 葉

齒がぬけてから噛みしめる親の恩
孝行のしたい時分に親はなし
御先祖に討死さして高枕
叩かれて痛くないとて孝子泣き
親への異見寒暑には他行止め

五 夫 婦

素戔嗚尊御詠

八雲立つ出雲八重垣妻ごめに八重垣つくるその八重垣を
光明皇后
我せことふたりみませばいくばくか此降雪のうれしからまし

○天智天皇崩御ましせし時皇后なげきたまひて

人はいざ思ひやむとも玉かづら影に見えつゝ忘れぬかも

我せこが來べき宵なり笹蟹のくもの振舞かねてしるしも 衣通 姫

敷島の倭の國に人ふたりありとし思はゞ何かなげかむ 伊 勢

葦の屋のこやの篠やの忍びにもいなくまるは人の妻也 柿本人麿

君が家にあれすみさかの家路をも我は忘れじ命しなずば 高橋連黑人

吾妹子に猪名野は見せつ名次山角の松原いつか示さむ 大納言長雅

女郎花我しめゆひし一本の外に心はうつさゞらなむ 清慎公實顯

女郎花見るに心はなぐさまでいと昔の秋ぞ戀しき 祝部成仲

秋風の身にしむばかり悲しきは妻なき床の寝ざめなり鳥 式部卿 王

今は我誰と共にかならぶべき古き枕を見るもかなしき 明 王

妹が門出入るごとにはや行て早や歸りこと云ひし人はも 小野古道

みどり子を見れば涙の敷そひてありし昔ぞいと戀しき 伊藤維禎

我後をたのみし人は先立て老にける身をいかにしてまし 小野古道

人も見よ人にも見せよ朝夕にかゝる心のかゞみ照して 中 川

亂るなよ操を立てし賤はたは錦にまさる麻の狭衣 金 澤

山の井のあかぬ影見る外にまた餘れる水をくみは濁さじ 信實朝臣

思へたゞ心渚のをしだにもよその妻には流れあふかは 越 前

○討死のとき妻に別れを告るとて

古郷に今宵ばかりの命ぞと知らてや人の我を待つらむ 菊地武時

詠み送られたる一首を見て妻はまた直に一首を残して自刃した

古郷も今宵かぎりの命ぞと知りてや君の我を待つらむ 武 時 妻

神代よりかくありけらし慈しみ恵みこと問ふ妹と脊の中 本居太平

思ほしき心隠さず睦まじくあみもえまらずもかたる妹と春 同
さらぬだに重さが上のさよ衣我つまならてつまな重ねを 寂然法師
我宿のつまだにあるをあやめ草よそにはかけじ露の契も 小澤蘆庵
手折らじな人の垣根の梅の花われにて知りぬをしき心を

○東に旅立せんとて妻に(燕居雜話)

やがて咲くあづまの花を家苞に手折りて歸る折を待なむ(夫)
うつろはて早歸りませ咲き匂ふ東の花に折りなるゝとも(妻)
あづまぢにしはし心はとむれども花の色には移らざり(夫)
櫻田に春をすぐして咲匂ふうの花衣着つゝかへらん
春知らぬ我身悲しさいにしへにつらねし枝の花に分れて
思へたゝ連ねし枝はくちはてゝ頼むかたなくなれる心を
いかにせんつら離れたる雁がねの立ども知らぬ秋の心を

妹こそはまぢくたびれめ馬駕にのりて旅ゆく我よりも猶 赤松金鶏
あま雲のよりあひ遠くあはずとも仇し手枕我はまかめや
別にし其日はかりはめぐり來ていきも還らぬ人を戀しき 伊勢太輔
見ても猶袖ぞぬれぬるなき人のかたみとしのぶ水莖の跡 盛方妻
賤や賤賤のをたまきくりかへし昔を今になすよしもがな 靜

○紀の有常の女花子が、夫在原業平の毎夜遊びに行くを知らぬ風をして居るので夫は却てあやしみ或夜遠く出て行きたる風に見せて軒下にて様子を見うかがへば妻は此歌を詠みて夫の行先を案じわづらふを聞き夫は感じて以來夜遊びを止めた

風吹けば沖津白波立田山夜半にや君がひとりこゆらむ 香山花子
吉野山峯の白雪ふみわけて入りにし人のあとぞ戀しき 靜

○南朝の忠臣北畠親房の子顯家は多くの功名をなして阿部野に戦死した、夫人は尼となりて後生を弔ひしが尙たへかねて
とむさてもなほも忘れぬ面影は憂世の外の物にやある覽 顯家夫人

思ひ川ふかき淵瀬に沈むとも誘ふ水には名を流さめや 奈良義成妹
黒髪の亂れたる世ぞ果しなき思ひに消ゆる露の玉の緒 武田勝頼妻
我せこよ物な思ひを事し有ば火にも水にも我なけなくに 安部女良
今更に何か思はむうちなびき心は君によりにしものを

あり磯こえほかゆく浪のほかこゝろ我は思はじ命しぬ共
君をおきてあたし心をわがもたば未の松山波も越えなむ
秋風のすぐく吹とも葛の葉の恨み顔には見えじとぞ思ふ 和泉式部
諸共に消えはつるこそ嬉しけれ後れささだつ習ある世に 別所長治妻
かくて世にふるの高橋行末も君をぞたえずたのみ渡らむ 萬秋門院
先だつは同じ限りの命にもまさりてをしき契りなりけり 細川忠興
夫人

○袈裟御前が遠藤盛遠の爲に打るゝ時の遺書とて世に傳はれるものの中に
「女はさらぬだに罪深しと承りはべるに、憂身の故に多くの人を失ひぬべければ

我身一つを失ひ候ひぬ、獨り残りおはして嘆きおぼしめさん事こそ痛はしく侍れ、
何事も然るべき事と申しながら、先だちまゐらせぬる悲しみ言はん方なく侍る、
構へて後世をよく弔ひたべ、佛になり侍りなば母御前をも亘殿をも必ず迎へたて
まつるべし、萬づこまやかに申したくはべれども落涙に水莖の跡見えわかず」

露深き淺茅が原に迷ふ身のいと暗路に入るぞ悲しき 袈 裟

○笄はかみかきにて、夫を得て始めて髪をかきあげし故に嫁入より前には用ひなかつたものである、伊勢物語にも

くらべこし振分髪も肩すぎぬ君ならずして誰かあぐべさ(伊勢物語)
子を持てはや年頃をへたりとも妻にな心あけて語りそ 北條時頼

○大内義隆は妾を愛し置けるが、ある時妾の許へ送るべき文を使者の者が誤りて妻の許へ送つた妻は其儘にして妾の方へ書添へて送つた歌に(靜山隨筆、燕居雜話)

頼むなる行末かけてかはらじと我にも言ひし言の葉の露

夫義隆の方へは

思ふ方ふたつ有磯の濱千鳥ふみたがへたる跡とこそ見れ

君なくば何身飾らん櫛笄なるのげの小櫛も取んと思はじ

○これは道成寺と云へる歌に「誰に見しよとて紅かれつけよぞ、皆な主への心中立、云々」と同意である。(翁隨筆)

○備前の家士池田多治見の妻は坊城大納言の妹である、常に菊を好て作つて居たが、ある時に夫の心の適はざる事があつたか離縁になつたから斯く

身の程を知らで別るゝ宿ながら後榮を行け千代の白菊

其友なる人之を多治見に示して諫めたので元の如く夫婦となり榮えたと(隨筆見聞録)

○息女結婚の時の誠としてよめる歌

そむくなよ夫につかふるみちのくの細布衣胸あはずとも 香川景樹

○鳥井與七郎の妻は主淺倉氏が織田勢の爲に滅ぼされて敵兵山田城に亂入して彼を辱かしめんとした、其時敵を欺て井戸に投じて死した

世にふれば由なき雲ぞ蔽らむいざ入りてまし山の端の月

(支那の明初に陳友諒の部屬なる鄧平章と云へる者が江西を陥れた時に蘭氏の美貌を見て其幼兒と共に掠奪したので其辱しめられん事を知り、幼兒を刺殺して自刃した、其時指を嚙て壁に題して

涇渭難分獨興清 此身不幸厄紅巾 孤兒豈忍更他姓 烈婦寧甘事二人
自刃自揮心似鐵 黃泉欲到骨如銀 荒村日落猿啼所 過客聞之亦慘神。

○何れの時にやありけん、妻を厭うて去る人があつた、既に出むとする時霖雨甚だしかつたから夫の曰くしばらく待て風止み雨晴れて後去るべしと、婦泣て詠む

降ば降れ降ずば降ず降ずととととも乾ける袖ならばこそ

夫之を聞て感悔して留む

(唐宗遺史に曰く、天祐年中に妻を去らんとする人あり妻は泣くく船に上りて詩を止めて去る

當時心中已相關 雲散雨收一餉間 便是孤帆徒是去 不堪重過望夫山
夫は之を見て凄感堪へ難く再び借老を契れりと。(異域同日談)

○明治三十八年の宮中の新年御勅題(新年山)に一兵士の妻が詠進して撰歌の榮を蒙りし歌に

つはものに召し出されし我せこはいづくの山に年迎ふ覽

八四

○奥州田村郡赤沼と云ふ所に馬之丞と云ふ人があつて、ある日赤沼の沼に鶯鶯一雙居るのを見付て弓を射て其雄の方を得て歸つて來た、其夜馬之丞の夢に美婦人枕上に來りて潜然として泣て居た、怪みて其故を問はば昨日赤沼にて夫を殺したまへる悲しみに堪へずして來た、自分も長くは居るまじと云て一首の歌を残して去た

日暮るればさそひし者を赤沼のまこも隠れの獨寢ぞうき

馬之丞あはれに思ひ居る中一日を経て箭箆を見れば雌の方腹を自ら啖みて死て居た、馬之丞之を見て感泣し僧となつた、後年風早權中納言實秋卿碑を立て此事を記されたと(良齋問話)

(最明寺時頼回國記に下野國安蘇郡安蘇沼鶯鶯の歌として「日暮るればさそひしものをあそ沼の、まこもかくれの獨寢ぞうき」とあるが赤沼の誤てがなあらう)

こりずまに打はよせても岩が根に己れ碎けてかへる仇浪 行誠上人

○歌子はもと水戸藩の天狗黨と稱する勤王黨の一人に嫁かれ、良人と共に正義を唱へて獄に投ぜられ、良人は獄中にて歿せられた、後ち歌子は放免せられたが藩の大勢も一變して勤王黨に傾き、夫婦の苦忠も賞せらるゝ時となりて歌子は先に歿

したる良人を思ひて

嬉しさを一人聞くこそ悲けれ憂さをば共に聞にしものを 中島歌子
肩を垂れ裾にそよぎし幾尺は王のみ手にもまかれじと猶 與謝野晶子

○女房を離別して後つれづれなるまゝよめる

追出すは茶漬飯より易けれど只さいのなき心地こそすれ 黄金持丸

○妻の身まかりける時に

思ひきや妻は此世をさるまはし編笠を着て送るべしとは 桂 家 風

○寄月懷舊

共に見し月のうさぎも昔にて今日は供養に餅をこそつけ 文屋古文

○京都のある豪家の主人が如何にもして妻を怒らしめんと

焼餅は焼かねど顔はくすぼりて色はまつ黒尻はぼつてり(夫)

八五

ありがたや姿のみにて恥かしき心のさまを包みたまふは(妻)
心をば鏡にうつし見玉は姿にまさりさをな恥かし(同)

○夫婦の喧嘩の歌

脇坂義堂

小豆餅のやうな面をば膨かしなほ焼餅をやくたいもなき(夫)
又しても又悪性をすり鉢の鼻が顔まで味噌をつきやるか(婦)
散れば社いと櫻は愛たけれこちらの鼻めも早う死なぬか(夫)
杜鵑啼きつるかたは長命しあほの親父のあとに残れり(婦)
秋が来て顔は紅葉のつらくやはらが立田の山の神めが(夫)
寒氣よりはげしく當る親父めに熱燗一杯のまじやりたや(婦)
女房は愛するものと知りながら晝はそまつにせしを思や(夫)
夫には従ふものと知りながら夜のみとこそ思ひしを憂き(婦)

小半コウカウの酒は夫婦の恩がへし涙と共にくみて喜ぶ
妻ならばいせずは裾も合すまじ裏は表にまかす身なれば
歌をよむ女房などはもたぬもの亭主を尻に敷鳥の道 福田行誠

○ある家の子息に妻を嫁らんとするに氣質は良けれども片目なるが好ましからずと云ふある人きいて

みめよきは夫の爲のふためなり女房は家のかためなり鼻

○妻におくれし時

貞

柳

いつの間に誰が桂馬を現ウツなく並びし駒をはづしぬるぞや
垣越に我を冬瓜のやさしさよ今宵ちぎりて我さいにせん(男)
垣越に君を冬瓜の出来心ちぎりたまふな主のあるのじや(女)
さるといふ夫に嬬はいぬといふ犬と猿との喧嘩なりけり

○女繪の賛

家と子を守り袋ぞあらたなる氏神よりもうちの神さま 式亭三馬
手細工にさや縮緬はあつむれど男ぎれをばよせぬ女乙子 屋職堅丸

○醜女をあはれむ

門々へ顔もて見せに行にこそ見共ないとは世の人の無理 貞柳
兩方の山高くして谷のはなさそふ嵐のきづかひもなし

間々に顔見合せて 田植かな 乙由
腹のたつ人に見せばや池の鴛鴦 野水

○高野山の奥院に咲亂れたる女郎花を見て或る人

餘所に咲け 高野の奥の女郎花

傍に居たる小坊主が

名をかへよ 高野の奥の女郎花

亭主はと問へば岩根の清水かな
紙雛の契りはふかしもたれ合ひ
中丸くうちは同士の涼みかな
火ながらも水に中よき螢かな
陸まじき中に別あるひいかな
雛棚や重ねぬつまも此ためし
撫子や節の間もたゞ美しき
姫百合の何やら思ふ姿かな
鍬の刃に葦をのせて子をつれて
夏やせと答へて忍ぶ涙かな
うき事になれて雪間のよめ菜かな
影膳に蠅追ふ妻の操かな

適山 梅室 勇枝 明石梧角 歌竹 富翠 斜嶺 溪泉 梅室 西山宗園

彼の男此の男とて古くなり
添乳して棚にいわしがござりやす
淨はりに亭主の外が五六人
新世帯雨戸明くれば晝ぼらけ
女房の櫛は家のしめくゝり
和せ夫婦下駄も片齒で歩まれず
再縁の嫁は朱書きて来る端書
新夫婦よぶ時オイとネゝあなた

六 姑 媳

姑と嫁と小袖のうらはらに心のつまのいかで合ふべき
古への嫁のつらさを思ひなば鬼婆ぢやとは誰か云ふらん
地獄では鬼のゑじきに何をすする其嫁悪む姑をすする
鬼婆と蔭で云ふのを知らずして嫁を誹りに又も出あるく
秋茄子わさゝの粕につけませて嫁に喰れじ棚におくとも
我夫げに大切に思ひなばなど姑のみにくかるべき
巳が子の榮えをいのる心あらば膝をりまげよ家の元祖に
にこゝとと機嫌よくして父母の心にまかせなびき仕へん
姑を親ぞと思ひ仕へなば如何で再び家を出づべき
父母の悦びをさへ樂しめば仕へもやすし住よかるべし
姑をそまつにすれば巳が嫁うらをかへすはちツつけの事

抹香をひねり嫁をもひねつて居
目鏡から大きく見える嫁のあら
姑の針で糸ほど嫁は瘦せ

七兄弟

軒ちかき竹の園生のよしの風連なる枝に吹ぞ傳へむ

○悼妹歌

咲く梅の梢を見ても思ひ出る連なる枝のかれし名残を

早蕨のもえ出る野邊もあるものを昔に恥よ世の中の人

古へもたぐひもあらじ我宿に枝を連ぬるかじは木の影

二品法親王
尊

九條道房

二上彌三郎

前大納言光頼

武藏野のわか紫の衣手はゆかりまでこそ嬉しかりけり
山城のつゝさの原にものまふす我兄を見れば涙ぐましも
春しらぬ憂身も辛し古に連ねし枝の花に別れで
目の前に連なる枝のかれゆくをかゝる朽木など残る覽
思へたゞ連ねし枝は朽ちばて頼むかけなくなれる歎を
埋火のあたり長閑に兄弟のまとおせし夜を戀しかりける
春日野のはらから社は世の中のうさたの森の歎をも思へ
上つ枝の花の雫にうるほひてしづ枝のつぼみ香に匂ふ也

二品法親王
國依姫

從一位兼教

前關白基忠

按察使實繼

源定信

小澤蘆庵

村上忠順

兄弟の中も互に敵となる慾ははげしき劍なりけり
近きもの兄より外は更になし親なき時は親も同前
兄弟の中も慾から違ふぞと親の世にある時よりぞ知れ

兄弟が田を別取りの争はたわけ物とや人の云ふらん

九四

兄弟が同じ聲なる鉢叩
草花や姉はあとから拾ひゆく
春の雨弟どもも呼んで来よ
子供にはまづ總領や藏開き

櫻 良
吟 懷
鼠 解
蔦 栗

八 貧 富

天さがる鄙の住居と思ふなよいづこも同じ浮世ならずや
天さがる鄙には猶も居ともなきいづこも同じ浮世なれ共
富といふ富を積みても得がたきは我身にひめし寶なり鳥

細川幽齋
同
伊達千廣

○又破屏風に題して

破れはてそよ吹く風もたまらねど今猶骨は碎けざり鳥
人の世の富は草葉におく露の風を待つ間の光なりけり

同
小澤蘆庵

○十六夜の月を

盈ぬれば虧くる習ひを昨日より今日は哀れに見する月影
桃の枝高さ短きほどくになり身のぼりなん身を思はじや
幸ひのいかなる人か家も富み身も品高くなりはなるらむ
子孫のその末かけて思ふには富せんことぞまづ願はしき
先祖の光消さじと思ふにも富を願はぬ人あらめやは
妻子奴心たらひに養はむ思ふまにく家し富みせば
自らさるまじさにも悔られ輕しめらる身ぞ口惜しき
世の中は廣しといへど貧さに迫る身のみぞせん方もなき

本居太平
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同

九五

差あたり世にふるたつさなき人を救ひ助くる富人もがな
病のみ病とやいはん貧しさにありわづらふも病なりけり 同

恐ろしさ地獄の吐聞くよりもたゞ借錢と米櫃ヒツの音
非義非道なして溜めたる金銀は浮べる雲の如くなりけり

(橋上揚聲請一錢 可憐乞食幾旋年 人間富貴水中泡 昨日錦衣今日薦)

貧乏の神を入れじと戸を立てよく見れば我身なり
財寶は身の仇なりと知りながらなほも求むる人の愚かさ
世の中は心矢走に早れどもせむが無くは渡られもせず
一寸のひまなき用に差詰りのひ五分さたと成にける哉
山吹の鼻紙ばかり金入にみのひとつだに無さを悲しさ

一 休

蜀山人

みと漉コシの底に溜りし大晦日こそすにこそされずこそされず
貧乏の棒もかせげばものづから振廻しよくなるも世の中
儘ならぬ茶がひ白がひ小豆がひ此三がひを何時か逃れむ
長者山上りて奢る道へ出ばもはや下れる道と知るべし
寶多くあつても盡きる時ありと其心得を常に忘るな
金銀は神や佛や主親と恐れ尊みつかふべきなり
人は只智慧や藝には恐れねとかねには恐る金を持つべし
金銀を遣ひ捨るもたはげ者食はずにためる人も馬鹿もの
金を持つ人の作法をよくさけば只生き乍ら無慈悲餓鬼道
何時の世も世間知らずの義理知らず情知らずが金持になる
金持と朝晩する灰吹はたまるほど猶さたないと知れ
慾ふかき人の心とふる雪はつもるにつけて道を忘るゝ

金持を十人よせてながむればなかに五人は無學文盲
財寶のあるが上にも錢金をふやしたがるを貧人と云ふ
正直に貧にくらせど慾望なく慾心なきを福人といふ
貧福の迷ひの雲のはれて今月を見る夜の影のさやけさ
貧福の道の二一の追分や寶の山に借錢の淵

(楠公曰「雖貧勿求無道之産、雖窮勿語、貧窮素非私、唯不幸之所致也、悠々如龍、
猛々如虎、抱徳、隱名、潛身、以當待一陽來復之時、若不逢時、則了生來之境涯、
樂彼天命、更無疑」)

瘠馬の重荷に小附添て猶鞭をおふる世にこそありけれ
貧しきも富るも樂も苦しみも夢でこそあれ夢でこそなし
かいまさも蚊屋も質屋に有明のつれなく燻す貧の病つき

○駿河國原宿にて

浮鳥がはらふ路銀もつきはて、三國一のふじいかな旅 平秩東作

金錢は天下の人の通用ぞめぐる寶と知りたまふべし
奢りぬる人の榮華は仇花の早くも散りて實はなりもせず
樂好み遊山好みは己が身のやがてつふるはしと覺えよ
樂好み親の譲りをたのむ人貧の基とかねて知るべし
年季から仕出した人が金持て子に乳母置くも今の世の中

○貧くなりて藏を賣りける時に(萬代狂歌集)

身につくる物とてもなき裸馬くらに離るゝわれぞ悲しき 生鯛ひれを

○住みなれし家を人に賣りて

蝸牛なれにもはづるわが身かな家をひくべき力なくして 唐衣橋州

○質をおきつくして此頃は烏金をかるなりと人の言ひければ(萬代狂歌集)

闇の夜になかぬ鳥の利がくへば生れぬさきの質ぞ戀しき
まづしくて心のまゝにならぬのを憂とせぬが智者の清貧

持の人と持たぬ人とは性によるたとひ寶は多く得るとも
 心には綾錦をも着せよかし身にはつゞれの衣着るとも
 世渡は將碁と同じかくなればたゞ金銀のなくてかなはぬ
 非義非道いうてためたる金銀はうかべる雲の如くなり鳥
 形見とそ今はあだなれなき親のゆづり置れし貧乏の神 布留太造
 浅ましや貧乏すれば裾綿の下から出ても人にふまるゝ
 火の雨は誰が降らせる心から起る一事の誤りと知れ
 財産を持くさらかす病ひより一物もなき身こそ安けれ
 金銀も貸さず使はず施さず重ねて置ば石も同然

(明治十五年頃紙幣償却のため不景氣極端に達したる時成島柳北の戯作に)

「九圓又八圓 竟至六圓代 驚入米相場 村中大心配

納税漸濟時 身上近半潰」(小農夫)

「淺草神田又麴町 市之商賈總無形 東風吹盡空財布

顔色門松一様青」(小商人)

霜枯れに野邊の薄と我金はかる人なしに年を越えぬる
 黄金の色に似てさへ手に入らぬ向ふの岸の山吹の花

芋も子を生めば三五の月夜かな
 金持の暖かさうに亥の子かな
 咲く菊に見ゆるや常の心掛
 蝸牛とこて死ても我家かな
 子子や蚊になるまでの浮沈み
 西武 同 虚白 三津人

眠くとも仕て見たいのは金の番

留守かへ又くる年も空財布
ほれ薬佐渡から出るがいつちさく
暖かなやつには解る雪のはだ
金銀を持ち短命な下手將基
鍛冶屋の曰く錢金は湧きものだ
火の降る家は寒中もひとへ物
鯛を買ふ家が村でも恵比壽様

人生

一 日月過ぎ易し

○御製 御題 歳暮近

あら玉の年のをはりも近づきぬ暑し寒しといひくらす間に

○御製 御題 思往事

たらちねのみちやのみよは白雲のよそぢのよそになりけるかな

○御製 御題 老人

たらちねのみちやのみよに事へたる老も少くなりにけるかな

昨日こそ早苗とりしか何時のまに稻葉戦ぎて秋風の吹く

何時の間に紅葉しぬらん山櫻さのふか花の散るを惜みし 具平親王

きのふといひ今日と暮しつ飛鳥川流れて早き月日なり鳥

大納言經信

松竹の千代八千代こそ難くとも百歳をだに斯てへにしかし本居太平

千萬の金も珠も何かせむ命のみこそ寶なりけれ 同

玉ちはふ神のたまひし玉の緒は世に二のなき寶なりけり 同

先祖の譲り給へるたまもの緒たえはゆゝし凡可にすな 同

うつせみの此世にかくて何時までもあらまほしきは命なりけり 同

あるかひもなき病人も老人も今はの命をしまざらめや 同

明日ありと思ふ心にはかられて今日を空しく暮しつる哉 同

徒らに爲す事なくてすぎにけり思へば惜しき身の昔哉 同

世の中はかりほの垣の蝸牛角さし出すひまにぞありける 同

行誠上人

いつしかと今年も暮れつ今年はと思ひし事も徒らにして
爲す事もあらで今年も暮はどり誤まり勝に過しつるかな
一時も仇にはならじさりとては逢難き身の暮れ易き日を
聞く人の心々に驚かむ鶏はかはらぬ曉の聲
思ひさや夢の中なる夢にても斯よそく成むものとは
今日も又生命のうちに暮にけり明日また聞ん入相の鐘
何處をも定なき世と知りぬれば家をも旅の心地こそすれ

(天地は萬物の逆旅 光陰は百代の過客)

行末の身の幸あらん折々も世の常なきを思ひ忘るな
定めなき世の習ひにや憂き年も暮るとなれば亦惜むらむ
世の中は一日外はなかりけり昨日は過つ明日は知られず
けふの日も暮すばかりと思へども命をせむる使なりけり

明日よりは仇に月日を暮さじと思ひしか共今日も暮しつ
仇の世を實ならぬ事にあぐがれて明日だに知らぬ花をめでつ

下村房次郎

○梅翁ある年の暮に

暮やすしこんな事なら百年も

其一夜明けて元日に(消閑雑話)

立やすしこんな事なら百年も

世の中は三日見ぬ間に櫻かな

来る年はくくと暮にけり

下手將碁王より飛車を大事がり

露 蓼 川 太

二老

○御製 御題 老人

つく杖にすがるともよし老人の千歳の坂をこえよとぞ思ふ

若さかりやよいつ方へ行にけん知らぬ翁に身をば譲りて 藤原清輔

何處にも惜みあかさぬ人はあらし今宵許りの年と思へば 基 俊

過ぬれば我身の老となるものを何故あすの春を待つらん 京極前關白

花さそふ嵐の庭の雪ならでふりゆくものは我身なりけり 入道前大臣

暮て行く秋のかたみに置く物は我元結の霜にぞありける 平 兼 盛

浅ましの老や昔の見し人を思へば今の我身なりけり 毛利兵橋母

萌え出るも枯るゝ同じ野邊の草何れか秋に逢てはつべき 祇 王

あつとも身のうき事は變らぬと昔は老を歎さやはせし 平 唐 粒

竹馬を杖とも今はたのむかなわらは遊びを思ひ出てつゝ 西行法師

(一見竹馬戯、毎思童孩時)(白樂天)

竹馬の早しおそしを争ひし友は大方先立ちにけり
 盛りをばとふ人多し散る花の跡をとふこそ情ありけれ 正覺法師
 心のみさかしらがりて目も耳もちい衰ふる人のあはれさ 本居太平
 わかいらばかいらましやと衰ふる我身の老を打歎かるゝ 同
 見る人の醜まざらめや白髪おひ老舌いでゝよゝむ翁を 同
 老いしれて同じ事のみする人を若人はしか笑はざらめや 同
 かくてしもいつは死むと心には思はぬものゝ老は悲しき 同
 百千鳥さへづる春は物事に改まれども我を老りゆく 同
 おほあらしの森の下草老ぬれば駒も賞ずかる人もなし 同

(莊子に「壽則多辱」)

残りなく散るぞめてたき櫻花ありて世の中果の憂ければ
 何をして身のいづたらに老ぬらん年の思はん事を悔しき
 おしてゐるや難波のみつに焼鹽のからくも我は老にける哉
 深き夜にまづ明け行くと知られ鳧寝ざめの里に鳥もなく也
 櫻花散し梢に蟬なきて菊の枯枝に白雪を降る
 老が身は又來ん秋も頼まれず今夜の月を命なりける 三島景雄
 こし方は一夜許りの心地して八十路あまりの夢を見し哉 貝原益軒
 あらましの事皆夢と見ゆる哉寝る間ばかりや我世なる覽 香川景樹
 鏡には知らぬ翁の影とめて元の姿は何地行さけん
 夢どとも知らず暮し愚かさよ覺めてくやしき老の曉
 行先を兎やせん角と思ふ日の積りて老の身とどなりぬる
 忘れては夢かと思ふ思ひさや雪踏わけて君を見んとは 在原業平

危しと且は見ながら丸木橋渡りかけたる身をいかにせむ 小出 粲

虎とのみ用ひられしは昔にて今は鼠のあなう世の中
鶴九百九十九年め龜九千九百九十九年めア、尚齒會
賞ふこと厭てござると云ひ乍ら取ねはならぬ暮て行く年
懸取の來んと知りせば門さして留守と答へて逢はざらましを
蜀山人 大我夢庵 同

○ある人自語の贊に

自は見えず腰は屈まる齒はかける南無阿彌とつふたべる計りぞ

唐衣橋州

口惜しや身は老といふくせものに頭をさげつ腰を屈めつ
老人はとやせん角と思ふ間に早や日は暮て今に死るぞ
春秋をおくりしまうて山里の案山子は冬の時にあはざる

雪ふれば巨燧やぐらにたてこもり打て出づべき勢はなし 蜀山人

○三十二歳になりけるとき

年の數は三十二相になりぬれど器量のなきを人や笑はん 一 好

目は見えず耳は聞えず鼻つまり人の云ふ事なにも聞えず
何時となく腰も屈みて世の人にそりの合はざる身とはなりにき
老の腰曲りなりにも交はらむ浮世の人にそりは合はねど
笹本秋冬 莊 惠 翁

○四季一時來の歌

目はかすみ耳は蟬なく齒は落る降らねど積る頂の雪
いまたのむ釋迦が還俗して來ても聞ぬ氣なりし昔戀しき
法の道さしてほつさと折れたるは心あら木の弓取りの果
入齒してまがへて見れど物食へば顔に動きの取ぬ老が身
宮 下 家 四海雄左丸 生學堅文

○老人六歌仙

皺シヅがよるほくろが出来る腰曲る頭ははげる髯白うなる 仙崖和尚
手は振ふ足はひよろつく齒はぬける耳は聞えず目はうとうなる 同
身に添ふは頭巾襟巻杖眼鏡たんぼ温石しびん孫の手 同
聞きたがる死にともながる淋しがる心が曲る慾深うなる 同
くどくなる氣短になる愚痴になるてしゃばりたがる世話焼たがる 同
又しても同じ話に孫ほめる達者自慢に人はいやがる 同

○老人六歌仙の續二首(耳聾)

事足らず目汁をたえず鼻たらすとり外しては小便もする
宵寝朝寝晝寢物ぐさ物忘れ夫こそよけれ世に足らぬ身は
祖父は山やしはしが程に身は老て昔々のはなし戀しき 油煙齋
世の中の娘が嫁と花咲きて嬬としぼんで婆と散りゆく

○老身八衰の歌(楓林腐草)

月代夕照

蠅もさぞ難所と汗を流すらん夕日にまがふ月代サカキの照

眼鏡の秋の月

春のみか夏冬とてもかすむてふ眼鏡に照す秋の夜の月

髪色の晴嵐

たきこめし匂もいつか昔にてびんの白髪に嵐ふくなり

耳晚鐘

瓦屋の霜をさししも昔にてたえず遠寺の鐘の音のみ

水鼻の夜雨

秋風の吹くにつけてもくさめく流るゝはなは夜の雨かも

前齒の落雁

白玉か何ぞと人のうらやみし齒ぞさはみつゝ落る雁がね

髭の暮雪

薄莖にくまどる様の髭ならて今髪うけて積る白雪

襟卷の歸帆

杖のかち取てやうく歸るなり襟卷の帆に風をうけつゝ
世の事を聞じくとせし耳も遠うなれとは祈らざりしに也 有

○五十になりける年に

粟のいひ早にえたちぬ五十年四十九年のひをやけさまし 飯 盛

○六十になりける年に

順ふか順はぬかは知らねどもまづ是までの耳たぶにこそ 蜀山人
元結を喰ひ切たるも昔にて齒にいとたのむ口惜の世やつふり光
耳よりも遠き昔をしのぶなり寢覺にちかき老の小便 橘連武雄

我頭つよく光るは若きときあまり男をみがさすぎたり 酒 一友
麤相じてとりはづしたし年一つ昔は屁ども思はざりしが 麥藁笛成

○杖によせて

在し世のいさめの杖をさながらに今は親ともたのむ老哉 唐衣橘州
和學者は四角な文字もいらざればかなつんぼうと身はなりに鳧 橘 千 蔭

いくつ寝て春ぞと人に問ひし程待遠なりし年ぞ戀しき
落とめる其一葉こそ淋しけれ我身に秋の來ると思へば
死出の旅再び歸る道あらばいつと死たい年の暮かな
三味線を習ひし昔し懐かしや三筋ばかりの鬢となりては
暑さにはお客の相手つとめ得て雪のあしたは七輪の番
我脊に年の重荷の重ければ次第に腰の曲るくるしさ 大久保寄方

うかくと年よる人や古曆
ふくろふは花の浮世を晝寝かな
年寄れば鼠もひかぬ寒さかな
けふ見れば春の短かし衣更
我が年にもどろいて来る新茶かな
冬の蠅はへの力もなかりけり
あす越ゆる峰を見せけり今日の月
初雪や炭の行へも白く消え

一一六

芭蕉 千代女
園女 祇徳
圭徳

松井壺月
清錯庵

顔へ波うてば亂杭動き出し
隠居する下地坊主になつた筆
稻程に腰もかゞまる米の年
行末の見える頃には目がかすみ
古碁盤足がひよろつき目がかすみ
白さを見れば身ぞふけにけり頭
老後の儉約端書文尻つまり

三病

我身のみともかくにも嘆かれて思ふ事ならぬ世にもあるかな 本居太平
世にふれば事にふれつゝ様々に我身の憂ひやむ時どなき 同
足曳の病のみ社うたてけれ山にも野にも見にもえ行かず 同
寐屋のうち一人いぶせく明暮て月雪花を見ぬぞ苦しき 同
うまさもの酒も肴も禁といへば只一口もえこそまかせぬ 同

一一七

のむ薬口にかききたのみにていゆる日敷をまつ病かな 同

いとしく露の命をつひにはたいかになげく床の起臥 同

いたつきは我身をすてし去りぬめり残る命を物笑ひなる 勝安房

身體のもてぬからして氣を打し病は醫者の手にも叶はず

もろくの病の起る其元は家業不精で奢り不和合

看病の耳にふけゆく踊りかな 燕村

さりとす手足に聲をしぼりけり

病みあがり餘程覺えた薬の名

三日月はやせて居る筈やみあがり

四 死

いかならば雪や氷とへたつらむとけぬも同じ谷川の氷

あすまでもあるべきものと思はねばけふ蜩ヒコガネの聲を悲しき 梅壺女御

斯る時左こそ命の惜しからめかねて無身と思ひ知らずば 太田道灌

重頼返し

なき身とは誰も知れ共諸共に今はに及ぶことをしを思ふ 倭文子

人の世に先立つ事の無りせば桐の葉も散ずやあらなむ 平重盛

ちいとのみなき暮すまに簾蟲の聲よわり行く秋の夕暮 親鸞上人

柴の戸にあけくれかゝる白雲をいつ紫の色に見なさむ 同

露の身はこゝかして消えぬとも心は同じ花の臺を 在原業平

終にゆく道とは兼て聞しかど昨日今日とは思はざりけり

立のぼる煙につけて思ふかないつまた我を人のかく見む 和泉式部
 打つ人も打たるゝ人も諸共に如露亦如電應作如是觀 大内義隆
 未の露もとのしづくや世の中の後れ先立つためしなる覽 僧正遍照
 年月をいかで我身の送りけん昨日の人も今日はなき世に
 出る息の入るをも待たぬ世の中に又來ん春の頼まれば社
 昨日見し人はと問へば今日はなし明日又我も人に問はれん
 梶原景季妻

○柴田勝家の室小谷の方勝家と共に生害の時辭世に

さらぬだにうちぬる程も夏の夜の別れをさそふ郭公かな

勝家の辭世に(名言集)

夏の夜の夢路はかなき後の名を雲井に残す山時鳥
 終にゆく道とは聞けど梓弓はるをも待たぬ身とぞ成ぬる 大谷正道

○辭世

思ひおく言の葉もなく終にゆく道は迷はじなるに任せん 黒田如水
 身を思ふ人こそ實にもなかりけれ憂かるべき世の後を知られば
 父母によばれて假の客に來て心残さずかへる古郷 閑通和尚

(林子平の作なりとも云ふ)

雨あられ雪や氷とへだつれど解くれば同じ谷川の水 鹽山抜隊禪師
 おひしきて取返すべきものならばよもつ平坂路はなく共 香川景樹
 世の中は今日人の上翌日はわが身の上なりと心得んかな 荒木田守武

○慧心僧都は始め和歌を嫌ひて月花を愛て、隙を取り學道觀念の障りとなると云は
 れて居たが一日子供が縁に出て手水を使ひながら

手に掬ふ水に宿れる月影のあるかなさかの世にもすむ哉
 世の中を何に譬へん朝朗こぎゆく船のあとの白浪

といへる歌を聞かれて歌の妙をさとり後には撰集にも入るべき歌人ともなられた、
 或る年姉君安養尼の許へ送られたる歌に(本朝語園)

後の世と聞けば遠きに似たれども知らず今日もや其日なる覽 慧心僧都
何事も皆詐りの世なりけり死ぬるといふも眞ならねば 一休禪師
はかなしや鳥部の山の山送りちくる人として留るべきやば
あはれさよ鳥部の山の夕けふりそれさへ風に後れ先だつ

○北白河宮のかくれさせ給ひし時

いとも惜しいとも慕なし吹荒む常なき風のいとも恨めし 勝安房

○丹後國のある山寺に手習ひせし兒が視の水に白き櫻の散りけるを見て

世の中を花もうしとや思ふらむ白き姿を墨染にして

如何なる故にや其日の中に其兒死しけるが一周年の弔の時師の坊は佛前に鉦打な
らしつゝ

去年の今日花ゆゑ散りしちごのため今打ならず鐘の一聲

折柄佛壇に聲ありて(崎人百人一首)

花ゆゑに問はるゝ事の嬉しさよ苔の下にも春は來にけり

○辭世

善もせず悪も作らず死ぬる身は地藏も譽めず閻魔叱らず 式亭三馬

○辭世

世の中の厄をのがれてもとのまゝかへすは天と地の人形 曲亭馬琴

○辭世

それ辭世さる程さてもそののちにのこる櫻の花し匂はゞ 近松門左衛門
書置も形見となれや筆の跡あすをも知れぬ老の身なれば 慈雲の母
誰も皆生るも知らず住家なし歸らば元の土になるべし 一休
世の中は喰うてはこして寐て起て偕其後は死ぬる許りぞ

○相摸新井の城主三浦義同入道道寸(永正十五年七月十五日討死)の辭世に(鎌倉管)

領九代記

打つ者もうたるゝ者も土器カハラクのくだけて後はもとの土くれ

○辭世

狂歌師もけふかあすかと成にけり紀の定丸も定なき世に 紀定丸

息のある内は手柄の岡持や死ての後は日からの牡丹もち 手柄岡持

長生を手柄にしたる岡持もいつか木魚となりにけるかな 同

鶴もいや龜もいや松竹もいや只の人にて死ぬぞめてたき 蜀山人

何故に生れ來し身と知らぬひの知らで消行く人や何なり 矢野玄道

○授戒したりし頃ある人の來りて汝が釋門に入りしもまた例の狂言にて眞の道をし
たるにはあらじなどおさみはべりければ名取川の狂言を思ひ出で(萬載狂歌集)

斯るとき救はせ給へ名取川今よりあみに入りし身なれば 祝阿彌

○本田平八郎死去の時家臣大谷三平が追腹切たのを 又續て追腹を切りし草履取の
者の辭世(王嶺叢談)

死にともなア、死にともな去ととも君の情の今は恨めし
提さぐる我得是足ユクシの一つ太刀今此時ぞ天になげうつ 千利久

「人生七十、力圍希吐、吾遣寶劍、諸佛共殺」
之は千利久の辭世である、其裔如心筆跡の一軸を寫したものであると。(其蝸翁草)

○辭世

終にゆく道とはかねて芝るびのはからせたまへ極樂の枳 柏 筵

(柏筵が墓の芝の御寺にあれば斯く詠るならん。)

○柏筵をいたみて

暫ととめて見たれどつがもないかはいの者や死出の山路 讀人不知

○辭世

この年で始めて御目にかゝるとは彌陀に向ひて申譯なし 慶紀逸

○辭世

あなきたな今は南のひがしれて西より外に逃げ所なし 來 示

○年頃園基を好みけるが心地死ぬべく覺えければ

基であれば思案工夫もあべきが死ぬる道には手一つもなし 加藤道喜

○柳生くらの介のみまかりけるとき

世に一人のかたれぬ所あり無常の風の大刀さきを見よ 藤本由己

○大根太木が一周忌に寄柏餅懷舊といふことを人々よみければ

挽白の一回はりにもなりにけり過し昔のなつかしは餅 蜀山人

○妻のいたみに

吹からに山の神さへしにぬれば無常の風を嵐といふらん 平秩東作

老ぬれば同じ事こそいはれければいとしやおばいとしや 同

○藤田あかしといへる狂言師をいたみて

やるまいぞやるまい物を誰かある捉てくれよ死出の山人 から衣橋州

○無常といふことを

終に行く道とは兼てなり平のなり平のとて今日も暮しつ 由縁齊

兵法を使ふ様こそなかりけれとかくしないでかなはざる身は 如竹

まぎらはす浮世の業の色取りもありとや月にうす墨の空 多賀一蝶

○辭世

來て見ても來て見ても皆同じ事此所らで鳥渡死てみようか 念佛坊

○辭世

此世をばどりや御暇に線香の烟と共にはい左様なら 十返舎一九

今迄は人の事だと思つたに己が死ぬとはこいつたまらぬ 同

身代をやつて死ぬると思ふなよ貰ふた人も又置て行く

我物と思へば後は人のものそのまた後も人のものなり

千早振る神の御末は我身にて出入の息は外宮内宮

往生を願ひはせねど是非なくば八十八を過してのこと
 冥途から迎の鬼が來たならば九十九までは留守と答へよ
 留守といへば又もや使來るべしつそ厭ぢやと云切てやれ
 鳥邊山空に煙のもえたらばはかなく消し我と知らなむ
 たき木つき雪ふりしげる鳥邊野は鶴の林の心地こそすれ
 尋ねつる草の原さへ霜枯て誰に問はまし道芝の露
 消えぬべき露の浮身の置所何れの野邊の草葉なる露
 露といふ心を知らぬ慕なさよ消ゆるばかりに思ふ我身を
 へんがへをすればよいのに先の世の約束事も事による也
 宗十郎

○同人辭世

御垣守衛士の燎火のとろく〜と眠らば霜と消や果つべき
 美しき刻み煙草の色も香も息引取れば灰とこそなれ

駕かきも乗り人も同じ旅なれば一足づゝに先は近づく
 身はふいご出入息は風なれや打わり見れば風も火もなし
 長かれと願ふ命の長からて延びてせんなき髪の長さよ
 西東南にとりてわさまへよ縁にひかれて娑婆へ來たから
 世の中の人と煙草のよしあしは煙となりて後にこそ知れ

中山鬼卯

○久しくわづらひて今はとなりけるとき

假の世の地水火風をかへすなりこれて五りんの差引もなし
 かねてより君と母とに知せむと人より急ぐ死出の山道
 骨つゝむ皮には人の迷ふらめあしたに野邊の白骨となる
 みな人の知り顔にして知ぬかな必ず死ぬる習なりとは
 裸にて來たる身なれば寶をもすて裸でまたかへるらむ
 情には野邊までこそは送れども土の下までとふ人もなし

唐來參和
原元辰

算盤にかしらぬものは無常にて二八も九々も同じ年なり

或人娘を失ひて歎くを或僧が

極樂へ嫁にやつたと思やすむ

母の付たる言

思やすめども

生れては死るなり鼻おしなべて釋迦も達摩も猫も杓子も

數へては足らぬを啼くや友千鳥

麥 林

散り椿あまりもろさについて見る

野 坡

白露やむふんべつなる置所

宗 因

蚊屋ごしに姿の見えぬ歎きかな

浪花老人

泣けくと目に吹當る木の葉かな

琴 風

九十九で死て一年をしがられ

死ぬの字をわけて見たれば一タビだ

五 人生觀(樂觀)

(天惠感謝をも含む)

うらくとのどけき春の心より匂ひ出たる山櫻かな 賀茂眞淵

深山木の其梢とも見えざりし櫻は花に顯はれにけり 頼 政

雲井より上なる空に出ぬれば雨の降る夜も月をこそ見れ 大道國師

此世をば我世ぞと思ふ望月の缺けたる事のなしと思へば 藤原道長

あら樂や人をも人と思はねば人が人とも思はざりけり 元 政

懐かしき君が心の色をいかで露ももらさで袖につしまむ 西行法師

くだかねどひとり碎けて厚氷もとの水にもかへる春かな

世の中は寝ても起ても在ぬべし煙は上り水は流れて 木下幸文

身に近く手にとりつかふ時々の萬の物のあるぞうれしき 本居太平
海さちも山さち物も保食ウケモチの神の御靈とたまふ賜物 同

天地の深き恵みにあらはれて今ぞ開くる梅の初花
あつから花咲く春のあじたには心のどけき鶯の聲
吉野山雲のあなたは知らねども見渡す限り櫻なりけり
何事も時ぞと思ふ夏來ては錦にまざる麻のさごろも
人と斯く生れつる身の嬉しさをいたづらになす我心かな
春雨のわけてそれとは降らねどもうくる草木の己か色々
天の原思へばかはる色もなし秋こそ月の光りなりけれ
霜枯と見しも恵みの露を得てみどりに返る庭の若艸
今朝にあけて昨日に似ぬは皆人の心に春の立にけらしな
花散らす昔は昔今は今親しくなりぬ木々の下風

病み臥て歩み得ぬ身の嬉しさよ道ふみ迷ふ憂しあらねば 座古愛子

○賤妓塵塚のお松と云へる者にある貴公子が己が名によつて歌よめとさげしみれば
(閑窓瑣談)

塵塚の塵にまじはる松蟲も聲はずじしきものと知らずや ち 松
何を憂へ何嘆くらん世の恵み餘るばかりの身をば忘れて

てんがくの串々思ふ心から焼たが上に味噌をつけるな 白川樂翁
世の中に歎きはなきに喜びを求むればこそ歎きともなれ
世の中に苦はなき者を我とわか樂を求めて苦しみをずる
行年の名残もいと惜まれて心に春の來るぞ嬉しき 虫
樂しまん昨日は過ぎつ明日知らず今日一日を心靜かに
目がさめて宿を立出ながむれば何處も同じ春夏秋冬

あすありと思ふ心のあればこそ今日一日も楽しかりけれ
天命の冥加にかなひ二葉より大木となる楠の石

○式亭三馬ある年類焼して假住居しけるに隣家に米屋があつて主の父は六十の坂を越へながらも壯健で白けたる米を桶に入れて日々賣歩く、息子は之を止るをも聞かず足腰の達者な中は遊んでは天道様に恐れありと穢ぎにかせぎけれども兎角貧乏神と離れざりしが三馬は(眞佐喜の加津羅)

桶の重荷よろく擔く春米やこがねもためず身をも果さず 三 馬

○乞食の歌に

一疊敷一疊着て居て月見れば二條殿とは誰か云ふらん 乞食
十五夜の月を寝ながら詠むれば伏見殿とは誰か云ふらん 同
一昨日も昨日も今日も食ぬなりくわんげ殿と誰か云ふらん 同

○相撲にて双方勝負の付かざる時行司のあつかひたる歌(塵埃集)

雪は折らん竹は折れじと積る間に風吹拂ふ東雲の空

箸取らば主人や親の恩を知れ我一方で喰ふと思ふな
深く其貴き道は知らねども何か心の日々に樂しき
おのが目の力で見ると思ふなよ月の光て月を見るなり
地の御恩千萬無量ときくときは厚しと云へどあらく踏れず
久方の天の恵みに開くとは知らでや花のしたり顔なる
喰ひつぶす六十年の米つぶの數限りなき天地の恩 蜀山人

○六十三才の時

あらたまの年も六十三ばさうとうくたらしく長いき 同

○辭世

時鳥鳴さつるかたみ初鯉はると夏との入相の鐘 同

○何時の頃にやありけん、江戸兩國橋とも云ひ、大坂四ツ橋とも云ふに一人の菰かぶりがあつた、其非人の詩歌に(煙霞瑠談)

「橋若路邊求一錢 可憐乞食幾千々 人間富貴水中泡 昨日着錦今亦筵」

ぬる間のみ人に替らぬ我身かなさめてはかへす曉の鐘

（或は云ふ「ぬるまのみ人に替らぬ思出を、浮世にかへすあかつきの鐘」
又信州地藏院の門前にて死たる非人の詩歌に

「漸出非人界 今還天上邊 破笠與破簑 夢覺寺門前」

くれくぬらさ嬉しさも今日は又同じ裸の花の身にして

○或人の掛物に

樂しみは後に柱前に酒機に合た客すりばちの音

○六十になりける年松契多春といふ事を

琥珀にも成べき松のやにちやぢねばりくて幾春やへん 杵 麻 呂

○松久縁

萬代をせなかにせたら老松の縁も久しかれいなるらめ 一文字白根
何一つ覺えし事のあらぬ身は忘るゝ世話のなさを樂なる 佳苔齋龜人

春浮氣夏はげんきて秋ふさぎ冬はいんきて暮はまごつき 北村季吟
花も見つ郭公をもまちいてつ此の世後の世思ふことなし 小林樂川
花見つ酒を飲みつ鶯の聲をきつ今日も暮れけり 祇園の梶女
さのみ身を思ひな侘をつらしとて憂とて世をば過ぬ者かは
貧乏はしても下谷の長者町上野のかねの迂鳴るをぞ聞く
都人いざとひ來ませ我宿は憂事なしの花盛なり

○乞食の辭世

月さへも高さに住めば障りありちさふしやすき草の小庭

「一鉢千家飯 孤身幾回秋 夕暖草筵裡 夏涼橋下流
不空還不立 無樂又無愁 人若問此六 明月浮水中」

（宮川 會 漫 筆）

（嘉永五年文月上旬下谷廣小路に四明堂といへるものがあつた、其傍に住なれし乞食が食器の裏に一詩を残して死だ其詩に曰く

「一鉢千家飯、孤身幾度秋、不空還不食、無樂亦無憂、
日暖堤頭草、風涼橋下流、人如問此六、明月浮水中、」（巷賢術談）

「橋巷路邊求一錢 可憐乞食幾千々 人間富貴水中泡 昨日着錦今亦筵」

ぬる間のみ人に替らぬ我身かなさめてはかへす曉の鐘

(或は云ふ「ぬるまのみ人に替らぬ思出を、浮世にかへすあかつきの鐘」)

○又信州地藏院の門前にて死たる非人の詩歌に

「漸出非人界 今還天上邊 破笠與破篋 夢覺寺門前」

くれくれぬらさ嬉しさも今日は又同じ裸の花の身にして

○或人の掛物に

樂しみは後に柱前に酒機に合た客すりばちの音

○六十になりける年松契多春といふ事を

琥珀にも成へさ松のやにちやちねばりく〜て幾春やへん 杵 麻呂

○松久緑

萬代をせなかにせたら老松の緑も久しかれいなるらめ 一文字白根

何一つ覺えし事のあらぬ身は忘るゝ世話のなさぞ樂なる 佳苔齋龜人

春浮氣夏はげんきて秋ふさぎ冬はいんきて暮はまごつき 北村季吟
花も見つ郭公をもまちいてつ此の世後の世思ふことなし 小林樂川
花見つゝ酒を飲みつゝ鶯の聲をきゝつゝ今日も暮れけり 祇園の梶女
さのみ身を思ひな侘をつらしとて憂とて世をば過ぬ者かは
貧乏はしても下谷の長者町上野のかねの迂鳴るをぞ聞く
都人いざとひ來ませ我宿は憂事なしの花盛なり

○乞食の辭世

月さへも高さに住めば障りありあさふしやすき草の小薙

「一鉢千家飯 孤身幾回秋 夕暖草筵裡 夏涼橋下流
不空還不立 無樂又無愁 人若問此六 明月浮水中」

(宮川 舍漫筆)

(嘉永五年文月上旬下谷廣小路に四明堂といへるものがあつた、其傍に住なれし乞食が食器の裏に一詩を残して死だ其詩に曰く

「一鉢千家飯、孤身幾度秋、不空還不食、無樂亦無憂、

日暖堤頭草、風涼橋下流、人如問此六、明月浮水中、」(巷贅術談)

日の恩やたちまち碎く厚氷

大高原 吾

年の暮嬉しや今日も腹たえず

羊 景

西瓜一つ野分を知らぬあしたかな

素 堂

乞食が見ても櫻は櫻かな

左甚五郎

樂しみは貧しきにあり梅の花

西山宗因

世の中は蝶々とまれかくもあれ

杉 風

朝顔や其日くの花の出来

雨 柳

豆に花咲て小豆の飯を焚き

六 人生觀(悲觀)

隱岐院

浮世にはかゝれとてこそ生れけめ理り知らぬ我涙かな

朱雀院

遠近の風とぞ今はなりなまし甲斐なき物は我身なりけり

春の花咲きては散りぬ秋の月満ては虧けぬあな憂世の中

大 輔

はかなくもあすの命を頼むかな昨日をすぎし心ならひに

源 家 隆

櫻花咲くと見し間に散にけり夢かうつゝか春の山風

源 實 朝

詠めこし花も空く散りはてははかなく春の暮れにける哉

紫 式 部

暮ぬ間の身をば思はて人の世の哀を知るぞ且ははかなき

行 尊

思ひ出て若も尋ぬる人もあらば有とな云を定めなき世に

世の中はととも角ても同じ事宮もわらやも果しなればは 蟬 丸
 有はなく無は數そふ世の中にあはれ何れの日まで歎かむ 小 町
 咲けば散り満つれば虧くる春秋の花と月とぞ人の世の中 成 章
 人の世の類ひとぞ見る水の上にあふるとはすれど消ゆる白雪 千 蔭
 悟り得て驚かぬには有ぬ身の世の常なきに習ひしも憂き 小澤 蘆 庵
 けふこそあれあすは飛鳥の川千鳥立居をかれて誰か定めむ 契 沖
 花紅葉さそふ色香を惜むまに身の春秋もつひの夕風 賀茂 真 淵
 はかなしや袂の雫草の露いつまでとてがおくれはつべき 直 枝
 一時もあたには爲し覺りてもあひ難き身のくれ易き日を 古 月
 此所も亦浮世なりけり餘所ながら思ひし儘の山里もがな 吉田 兼 好
 衣うつ筥屋あらはに月はれてかりがね寒し須磨の高浪 資 枝
 武夫の八十氏川の白浪にいさよふ船の行へ知らずも 柿本人 麿

わしの山常にすむてふ嶺の月假にあらはれ假に隠れて 元政上人
 なかくに山の奥こそ住みよけれ草木は人の上を云はねば 中 將 姫

○鈴木正三之を變へて

なかくに山の奥こそ住みよけれ草木は人の上を云はねば

○藤原俊成卿あるとき定家卿を訪はれて四方山の談の中に我はかく年老て、最早何
 の爲すべき事もなく先の見え透きたるを覺ゆと愚痴をこぼして

兎に角に若きは尙も頼みあり定めなき世に老の身を憂き 俊 成

○定家卿返歌

兎に角に老は許多の年も經つ定めなき世に若き身を憂き 定 家
 行水と過るよはひと散る花と何れまでてふ事を問はまし
 徒に安くもすぐる月日かないのを待つべき命ならぬに
 面影のうつらて年のつもれかしたとひ命に限りありとも 小野小町

露をなど仇なるものと思ひけん我身も露に置ぬばかりぞ 在原業平
夢の世に夢に夢見る夢人の夢物語りするも夢なり
昨日見し人はと問へば今日ははや鳥邊の煙あだし野の夢
露とのみ消えにし跡を來て見れば尾花が袖に秋風ぞ吹く 虎御前
假の世にまた旅寝して草枕夢の世にまた夢見るかな 慈鎮和尚
引よせて結べば草の庵にてとくれば元の野原なりけり

○乞食の歌に

寝る間のみ人にかはらぬ思ひ出を浮世にかへす曉の鐘
徒に今日も暮ぬと告る鐘にこたへて落る我涙かな 慈鎮和尚
花を見し人は程なく散りにけり我身も風を待と知らなん 大江匡房
月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身一つはもとの身にして 在原業平

○藤房卿世を逃れて後部より召されけるに

何事の羨ましさは歸るべき世にありとていといひこそせめ

父宣房卿岩屋へ尋ねおほしけるに藤房卿早くも何方へか逃れ玉ひて庵室の障子に
書きつけ置れし歌(年山紀聞)

住すつる山を浮世の人とは嵐や庭のまつに答へん
花の色はうつりにけりな徒に我身世ふるながめせしまに 小野小町
花もうし嵐もつらし諸共に散ればぞ誘ふ誘へばぞ散る
偽りて何にかはせん世の中の明日をも知らぬ人の命に
行末の思ひにぬるゝ涙かなあはれはかなき道芝の露
遁れても柴のかり庵の假の世に今幾程かのどけかるべき 兼好法師
世の中を思ひ續けて見るときは散ること花のさかりなれ 家隆

○辭世

ふさとよく風な恨みそ花の春紅葉の残る秋あらばこそ 北條氏政

我身今さゆるといかに思ふべき空より來り空にかへれば
あめ雲のちほへる月もむねの霧はらひにけりな秋の夕風 同

(自他本は一 此死亦尤誰 五十有三年 彈指愧無爲)

明日ありと思ふ心の仇櫻夜半に嵐の吹ぬものは
見し人の烟とさえし夕べより名もむつまじき鹽釜の浦 親鸞上人
露とちき露とさえぬる我身かな難波の事は夢の世の中 紫式部
紅葉を風に任せて見るよりはかなきものは命なりけり 豊臣秀吉
世の中はまどろまで見る夢なれば覺て驚く人のはかなき 大江千里
現とも夢とも知らぬ世にし有ば有とて有と頼むへき身か 一休
源實輔

○淺野内匠の辭世

風さそふ花よりもなほ我は又春の名残をいかにとかせん
定めなき風に任せて散る者を花とばかりに思ひぬるかな 福田行誠

扇がれて何時まで世には古扇やがて骨ともなり果る身を 同
時しあれば松も薪となれるなり何を常盤のものと定めを 同
もいとせも猶あきたらず行末を思ふ心ぞ物笑ひなる 江村專齋
秋の野の草葉の露を玉と見て取んとすればかつ消にけり 良寛
何時迄か明けぬ暮れぬと悲まむ身は限有て事は盡させず 元因禪師
世の中の物にたのみをかくるなよさだめなきかな 荒木田守武

○「本末究竟等」の意を

あさち原風をまつ間の末の露つひにはそれも本の雪を 有家卿
淺間しや思へば日々の別れ哉昨日の今日に又も逢はねば 澤庵和尚
年たけて又こゆべしと思ひさや命なりけりさよの中山 西行法師
波の上をゆく心して磯近くなりけらしな松の音さこゆ 小澤蘆庵
露の身といふもなか／＼空事よ出入る息にさゆる命ぞ

盛りぞと見る目もともに行水のしばし止らぬ藤なみの花
浅ましの花やと昔見し人も思へば今日の我身なりけり

思ふ事叶ねばこそ憂世なれかなはじなどか憂世なるべき
歎くとも今更かひのあらばこそ我をたのみに怠りし身は
今日とても世を長閑には思ねど明日知ぬ身の哀なりける
夢ぞかしたとへば思ふあらましを叶たりとて何程の世を
露よりも仇なるものと身を知りて命の中に我ぬしを知れ
埋めたゞ道をば松の落葉にて人すむ宿と知らぬばかりに
色々に花咲きたりと見し野邊のおなじの色に霜枯れにけり
思出のあるにも非ず過行は夢とこそなれあぢさなの身や
暫しけに息の一筋通ふ程野邊のかばねもよそに見えけり

一 休

なき跡の形見に石がなるならば五輪の臺に茶臼ほれかし 一 休

稻妻の影に先立つ身を知れば今見る我に逢ふ事はなし

○東山長嘯子が八月十四日に

明る夜の月を今夜の庭に見て命も知らず曇りもやせん 長嘯子

此歌を烏丸光廣卿に見せしに、心は面白し、されども言葉の綴き優ならず、此心を詠んには斯くあらまほしと宣ひつゝ、筆を取りて(其鯛翁草)

名にしあふ月は今夜に出て見よ身は浮雲の定めなき世に 光廣卿

人の身は何かつねなる水鳥の浮も沈むもさだめなき世に
今々と今といふ間に今どなく今といふ間に今どすぎゆく

○芝三田同朋町掃溜於松の詩歌(筆まめ)

「昔日連遊里 粧紅粉思忠 今日入禪寂 辭世養心中」

三従と五障の雲の晴ぬればひとり住む身の月のさやけき
何時までも浮世の旅の渡し守うるの浪路のあらん限りは 松

○維摩經繪の歌(赤染衛門)

浮き乍ら身には譬へん水の泡のためしに取らば消えぬべき哉(如聚法)
 雨ふれば水に浮べるうたかたの久からぬは我身なりけり(如泡)
 夏の夜の火影に惑ふ鹿見れば唯みづからの事にぞ有ける(如燭)
 秋風に碎る草の葉を見てぞ身の堅からぬことは知らるゝ(如芭蕉)
 幻にしはし形をうけんと思ふ心も夢にぞありける(如幻)
 夢や夢幻や夢とわかぬ哉いかなる世にかすまんとすらん(如夢)
 水に浮ぶ影は中にも有ねどもそれを有とは頼むべきかは(如影)
 いつまでか聲も聞えん山彦のよるつにつけて物ぞ悲しき(如響)
 行くへなく空にたゞよふ浮雲にけふりをそへん程ぞ哀しき(如浮雲)
 電の光とゞまる程みれば我身許りの物にぞありける(如電)

十二時神詠(謙齋筆記)

子ても又覺てもつらき世の中に在る甲斐もなき我住居かな
 丑といふ世に墨染の袖ならば心をつけよ法のしるしに
 寅が手に溜りもやせん秋の夜の草の葉ごとに宿る月影
 卯き事の夢になりぬる世なりせば今古へを思ひ合せん
 辰まゝに霞の衣かさね着て花のしたひも何時か解くべき
 己なかみは吉野の山につゞくらん花のいかたを誘ふ春風
 午れ来て世に住み乍ら露の身の消て墓なき名をや流さん
 未ほのさすに任せて行船もよる手にかゝる心こそすれ
 申からに心細くも聞ゆるは山より奥の入相の鐘
 酉の音に夢打さめてひとり寝の其曉は物憂かりけり
 戌さくら松山里に咲そめて木梢や匂ふささらぎの頃
 亥つまでも花に心のあくがれて今までの世を思ひ残さん

茲も憂し又行先もさぞあらん同じ浮世に同じ身なれば
波の音聞かじが爲の奥山に苦は色かはる峯の松風

四十八文字歌

幻のイロハニホヘトチリヌルヲ諸行無常と知るや知らずや
定めなきツガヨはタレゾツネナラム是生滅法入相のかね
ウキノオク生死のヤマをケフコエテ生滅々已音も香もなし
アサキユメミン夜は覺てエヒモセス寂滅爲樂涅槃はらずや

憂さつらさ悦び恨み樂しみに心なとめそ夢の世の中
何事も思へば安き世の中に心となげく我身なりけり
死て泣く生れて笑ふ人の常泣くも笑ふも嘘の世の中
夜半に見る夢に違はぬ浮世かなうつり變りて跡方もなし

恐ろしや西も東もみな無常逃道たのめ彌陀の浄土へ
こゝに消えかしてに浮ぶ水の泡浮世を廻る身に社有けれ
うつゝとも夢とも知らぬ一眠浮世のひまを曙の空
人間はゞ人をもいとへ白玉か何ぞと云うてさえたがる露
明日はかくと昨日思ひし事も今日多くは替る世の習哉
朝な夕な窓の戸障子己さへたがひちがひにたちぞわかるい
己が身は皆假物と知りながら實に假ぞとは思はざりけり
縦横の五尺に足らぬ草の庵結ぶもつらし雨なかりせば
善もいや悪もいや／＼いやもいや事々物々は物々にして
出る息の入をも待たぬ世の中に又來ん春も頼まればこそ

式亭三馬
松永貞徳
如竹

佛頂禪師

色は匂へど散りぬるを

(諸行無常)

我が世誰ぞ常ならむ
(是生滅法)
有爲の奥山けふ越て
(生滅々已)

あささ夢見し酔もせず
(寂滅爲樂)

〔イ〕より「ナ」まで十二字は護命僧正之を作り、「ア」より「ス」まで三十五字は弘法大師之を次ぐとも云ひ、或は石淵寺の勤操、延暦寺の最澄、高野山の空海相唱和して作つたとも云ふ、或はまた高野山の金堂を建るとき空海が大工に教へた木遣キヤリ歌とも云ふ〕

こちらむけ我もさびしき秋の暮
芭蕉
面白うてやがてかなしき鵜舟かな
同
寺々の鐘さしわける霜夜かな
蓼太
はき掃除してから椿ちりにけり
野坡
散るものに定まる秋の柳かな
柳亭種彦
辭世

修身

一心の鏡

○御製 御題 天

あさみどりすみわたりたる大空の廣きをものが心ともがな

○御製 御題 鏡

うちむかふたびに心を見がけとや鏡は神のつくりそめけむ

○御製

久方の空に晴れたる不二のぬの高さを人の心ともがな

○御製

言の葉の上にはほひてゆかしきは人の心の花にぞありける

○伏見天皇

天津空照る日の下にありながらくもる心の隈をもためや

霞む夜の月を見るにもくもらじと思ふ心を猶みがさつる 權大納言守房
 誰もみな心をみがけ人をしる君が鏡のくもりなき世に 權大納言資明
 いろ見えて移ふものは世の中の人の心の花にぞありける 小野小町
 まとも草つのもみ渡る澤邊には繫がぬ駒もはなれざりけり 俊惠法師
 神といひ佛といふも世の中の人の心の外のものは 源實朝
 よしあしに移る習ひを思ふにも危ふきものは心なりけり 伴蒿蹊
 心だに我思ふにはかなはぬ人を恨みんことわりぞなき 從二位爲子
 己が身のものが心になはぬを思はば法を思ひ知りなむ 和泉式部
 一筋に思ひ定むる心だにあらば浮世を歎かざらまし 正三位成實

底ひなき淵やはさわぐ山川の浅き瀬にこそあだ波はたて 頓阿法師
 年をへてすますしるしもなかりけり野中の清水元の心は 千種有功
 皆人の心一つの槌よりぞ千百の寶は打出すらし 荷田東滿
 知るや人たもつ心の玉だにも磨くにつけて光ありとは 西行法師
 いかで我れ清く曇らぬ身となりて心の月の影をみがくん 相摸
 濁りなく心の中に水すまはのどけき星の影も見えなむ 紀貫之
 あみの目に吹くる風はとまるとも人の心をいかゞ頼まん 中將
 夜もすがら佛の道を求むれば我心にぞたづね入りぬる 傳教大師
 見ず聞ず言ざる迄は繫げども思はざるこそ繫がれもせず 西行法師
 心から心に物を思はせて身を苦しむる我身なりけり 源空上人
 我心池水にこそ似たりけれ濁りすむこと定めなくして 源空上人
 受かはる十の姿のさまぐに唯心よりなすにぞありける

杉も杉宿も昔の宿ながらかはるは人の心なりけり
 悪きとも善きともいかゞ云ひ果んをりく變る人の心を
 いづくへも心とまらば住かへよながらへば又もとの古里
 花の色は昔ながらに見し人の心のみこそうつろひにけれ
 濁りたる水にも月はうつるぞと思へばやがて澄む心かな
 竹はすぐ松は曲りて面白やあのをれくが心々に
 影清き月の鏡のくもらめや名はちりの世の秋うつるとも
 人間はゞ鬼は居ぬとも云ふべきに心とは何と答へん
 我身なほ我思ふにもかなはぬに人を心にまかすべしやは
 よしさらば物を心にまかせじよ心を物にうちまかせつゝ
 いづくぞと己が心を尋ねれば迷ひの消えし所なりけり
 思は思む思ねば思ぬ思むといふ文字は己が心なりけり

弘法大師
 龍宗和尚
 元良親王
 願蓮法師
 加藤清正
 矢部駿河守
 無住法師

行水も何かさはらんよしもなく蘆も難波の水の心に
 汲みあげて見れば色こそなかりけり紅葉流るゝ白川の水
 起き出て物にまぎれぬ朝の心やもとの心なるらむ
 雲はれて後の光と思ふなよもとより空にありあけの月
 みな人の元の心は増鏡みが、ばなどか曇りはつべき
 なほからぬ心を隠す我影にいとほで照す月ぞ恥かし
 我心常盤の松に似たりけり世のよしあしに色をかへねば
 移りゆく初め終りや白雲のあやしきものは心なりけり
 幾度か思ひ定めて變るらむ頼むまじきは心なりけり
 心とは何を云ふらん不思議さよ墨繪にかきし松風の音
 思はじと思ふも物を思ふなり思はじとだに思はじや君
 世の中を思ふも苦し思はじと思ふも身には思ふなりけり

貞信尼
 太田道灌
 休

朝顔の花一時も千年なる松にかはらぬ心ともがな

(松樹千年終是朽 槿花一日自爲樂)(白居易)

伏拜む社の内は月なれや心の水の澄まばうつらむ
なす業に已が心は隠れぬを人は知らずと思ひけるかな
理りは藻に住む蟲も隔てぬを我から迷ふ心なりけり
世は海よ船は此身よ心をば梶ぞと思ひ深くつゝしめ
聞きわくる心の内の誠こそ教へによりぬ悟りなりけり
心とも知らぬ心を何時の間に我心とや思ひをめけん
我聞し人の心を種として世々にや道の花や咲らむ
闇の夜も心の月の出ぬれば何處へ行くも道は迷はじ
何かたに花咲らんと思ふより四方の山邊に散る心かな
よしあしの聲はたがはじ難波江や底すみわたる水の鏡に

慈鎮和尚

三輪純齋

よしあしのうつる心の水鏡よく見れば我姿なり
よしあしのうつる鏡の影法師よく見れば我心なり
鳴瀧の夜の荒しにくだかれて散る玉ごとに宿る月影
鏡にぞ心は似たるしかはあれど鏡は影をとめやはする
さして行く心の道し直からは何か人目をばかりのせき
月と日の清き鏡にはぢざるは赤き心の誠なりけり
うれしさも憂も忘れていぬる間は神の心に通ひもぞする
薄紅葉赤き心を問はれては散らでなかく恥かしきかな
何事も外に求むな省みて心の鏡ときみがくなん
心程人をよく知るものはなし恐ろしの世や頼もしの世や
いかにして漉きかへさまし漆こそ紙より薄き人の心を
立返り見よや心の鏡山曇らぬ君がもとの姿を

小澤蘆庵

伴 蒿 蹊

三條實美

勝 海 舟

武田耕雲齋

下村房次郎

品川彌次郎

高崎正風

露よりもあだなるものと身を知りて命の中に我主を知れ
伊勢の海千尋の底の玉よりも得がたきものは心なりけり
世の中は寝亂れ髪カミの風情して昨日いひしや今日變るらん

荒木田守武

〇閻魔王が机の上に巻物を開きて奥驚せる書贊に(宮川舎漫筆)

心とはどんな物にて有やらんこんな物にて有やしつらん
我心鏡にうつるものならばさこそ姿のみにくかるらむ
傀儡師胸にかけたる人形箱佛出さうと鬼を出さうと
神佛また天道と名をかへてたゞ人々の心をぞ云ふ
地獄餓鬼畜生阿修羅佛菩薩何にならうとまゝな一念
我心我まゝならぬ我心我心ほどうきものはなし
るり瑪瑙さんごの玉もふみくだけ我に貴き如意寶珠あり

一 休

鏡見て影恥かしく思ふなら早く心を改めよ人
目の前のものを鏡と心得てかけをまことにうつせ世の人
元政上人

世の中の人の心は心かは心得てもて心一つを
畏カシコさにうつさばなどか成ざらん心からこそ身は賤しけれ
盗人もおのが寶はとられけりたづねて見ぬか本の心を
櫻花とく散りぬともおもほえず人の心ぞ風も吹あへぬ
人知らず人には恥よ恥てこそ終に恥なき人となるめれ
みめあしく姿に花は咲かずとも心に實をば結べ世の人
姿こそ鳥のえびすに似たりとも心は花の都にぞ住む
天かゞみ空にあるてふ世の人の曇る心を照してぞ見る
庭に生るちり／＼草の露までも影をほそめて宿る月かな
私をはなれて見れば心ほどあかるき鏡世になかりけり

人心鏡にうつるものならば美しからん元日の朝 磯野常寄

つくづくと思へば哀し何時までか身に使う、心なるらん
極樂も地獄もあのが身にありて鬼や佛は心なりけり
其儘に心ばかりを住みかへよ里の庵も深さかくれ家
音もなく香もなき人の心とて呼ば答ふるものはとも誰れ
手や足のよごれは常に洗へども心のあかを洗ふ人なし
朝夕に顔と手足を洗ふなら心のあかもすすぐべきなり
よごれても鼠色でも人は人濁りに染ぬ蓮の白糸
我まゝの人の心のくわいらいし鬼餓鬼出せば佛かくるゝ
何事も善惡ともに我にあり形直せば影は曲らず
枝葉よりとかく心の根が大事萬能よりも一心を知れ
美しき巻繪の箱も藁づともその善惡は内にこそあれ

掘らぬ井にたまらぬ水の波たちて影も形もなき人ぞくむ 休

○鍋の詩證

よさに煮よ悪さにゝるな鍋て世の人の心は自在かぎなり 白河樂翁

○おかめの詩證

我ながら左も美しき姿かな心みにくき人にくらべて 一 休
本來の面目坊が立すがた一目見しより戀とこそなれ

瓢箪の様に身持がふらつけば心の駒がどこへ馳よやら
知れがしな世の人顔のさまくにかはれば變る心々を
見る内にはやいろくとからくりの變り易きは人心なり
唯滌げ心の垢の落ぬ間はのりだちのせぬ物にぞありける
日毎々々心の鏡みがき見ようその姿の置所なき
世の中に太かるべきは宮柱細かるべきは心なりけり

荒木田守武

折りて後もらう聲あり垣の梅
岩藤と尾上鏡の裏表

沾 徳

二 勤 勉(學問)

○御製 御題 曉更鶏

庭つどり告げぬ先と思ひしはまだ宵の間の心なりけり

○御製 御題 冬人事

三越路の雪にこもりて乙女等は夏の衣や織出すらむ

○御製

あまだりにくぼみし軒の石を見て難き業とて思ひすてめや

○御製 御題 机

よりそはむ閑はなくとも文机の上には塵をすゑずもあらなむ

○御製

時計るとけいの前にありながらたゆみがちなり人の心は

○御製 御題 夏朝

朝のまに物學ばなむ幼な子も晝はあつさに倦みはてぬべし

○御製

(戊申の詔書出したまへる時の御製の内の二と承る)

くろがねの的射し人もあるものを貫き通せ大和心を

○御製

うつはにも従ひながら巖をも徹すは水の方なりけり

○御製 御題 讀書

今の世に思ひくらべていそのかみ古にしふみを讀むぞ樂しき

○御製 御題 學校

今はとて學びの道に怠たるなゆるしのふみを得たるわらはべ

○御製

煙り草くゆらす暇も惜しと思ふ日は早や西に傾きにけり

○御製 御題 寄道述懷

言の葉のまことの道を月花のもてあそびとは思はざらなむ

○御製

真心をこめたる歌の言の葉は一度聞ば忘れざりけり

○皇后宮御歌

傳へ來し書ありてこそ知られけれ遠津御祖の神の御稜威を

○皇后宮御歌

人心かくぞあるべき白玉の眞玉は火にもやかれざりけり

○皇后宮御歌

みがらば玉も光は出ざらむ人の心もかくぞあるべき

○皇后宮御歌

萬づ民すくはむ道も近きよりあして遠きに行くよしもがな

○後龜山天皇

あつめては國の光となりやせんわが窓照す夜半の螢は

○後醍醐天皇

かずにあつむる玉のくもらねばこれも此世の光とぞなる

○村上天皇

教へ置くことたがはずば行末の道遠くとも跡はまどはじ

○後白河天皇

濱千鳥ふみちく跡のつもりなばかひある浦にあはざらめやは

一六八

ふみわけよ大和にはあらぬ唐鳥の跡を見るのみ書の道かは
 君のため民の爲ぞと思はずば雪も螢も何かあつめん
 をの子やも空しかるべき萬代に語り次べき名は立ずして
 水くきの岡べのさゝの一ふしを此世に残す言の葉もがな
 仕へこし身は下ながら我道の名をや雲井の代々に留めん
 よそにのみ見てや止みなむ葛城カサガキや高間の山の峯の白雲
 筑波山は山しげ山しげくとも思ひ入には障らざりけり
 爲ばなり爲ねば成ず成るものを成ぬと云は爲さぬなりけり
 傳へきく聖の代々の跡を見て古きをうつす道習はなん
 たづねずばかひなからまし古への代々の賢き人の言の葉

荷田春滿
 大納言師兼
 山上憶良
 藤原信良
 丹波經長
 源重之

前大政大臣實氏
 中納言通俊

秋津島人の心を種として遠く傳へし大和言の葉
 あはれとやみそなはずらん言の葉は必神の手向ならでも
 耳に聞目に見ることを寫し置て行末の世の人にいはせむ
 見る度に老の涙をそぐなり昔の人の筆のすさびに
 吾筆ぞあまり拙き名ばかりを記すに足ると思ひすてゝも
 秋風につらも亂れて行く雁のかげはづかしき筆の跡かな
 思ひやれ心の水の浅ければかき流すべき言の葉もなし
 恐かなるあとや知られん水莖の跡を心のしるべとも見ば
 書よまで遊びわたるは網の中にあつまる魚の樂むがこと
 徒に打おく書も月日へてあくればしみの住家とぞなる
 今はたゞ書より外の友もなし昔をかたる人しなければ
 親の親の代を汲しらる水莖の跡や子の子の知べにはせん

前大納言爲家
 遣造院内大臣實隆
 曾彌好忠
 伴蒿溪
 源光圀
 大政大臣實行
 前内大臣顯統
 權中納言武源光
 權中納言定家
 源光圀
 荷田東滿

みる書にしるし置ずば代々かけて昔を戀ふる跡は残らし 磯同三司實蔭

わりなしや人こそ人と云はざらめ自ら身をや思ひ捨べき 紫式部

人多き人の中にも人はなし人になれ人人になせ人 武者小路實陰

朝待つ人もこそあれいたづらに寢覺の月の夜を残す空 武者小路實陰

雨に待つ雲にながめて郭公かゝる心の晴間やはある 中院通茂

つらきをも憂をも忍ぶ思ひこそ心の道のまことなりけれ 賀茂秀保

緑なる一つ草とぞ春は見し秋は色々の花にぞありける 敏行朝臣

白露の色は一つをいかにして秋の木の葉のちよに染むらむ 村田春海

降り行このよの坂も知らざらん書見て遠き跡をとほねば 天地の遠き初めも見てぞ知る神代の書を今に傳へて

まづぶさにかで知らまし古へを大和御文のよになかりせば 本居宣長

書よめば大和唐土昔今萬づの事を知るぞうれしき 同

書よめば昔の人はなかりけりみな今もある吾友にして 同

食ふ物は満ても消ゆる腹の中に長く残るはよめる書なり 同

書よまで何につれくなくさまん春雨の頃秋の長さ夜 同

折々に遊ぶいとまはある人の暇なしとて書よまぬかな 同

書よめばまたたぐひなき樂みを書見ぬ人は知らぬなり 同

千萬の書も年へて怠らず讀めば讀うる物にぞありける 同

いろはだに得知らぬ人を果敢無と見つゝ書見ぬ人ぞはかなき 同

學べたゞ夕に聞きし道の邊のあしたの露の結びそめにし 幡隨院了碩

いそげ人いづれの道を學ぶとも老は心のつきてかひなし

何事もやしなひて見よ秋の田の稻葉ももとは植し早苗を 松平定信

あし引の山を抜くてふ手力も身には思はず心にもかな
契 小澤蘆庵
みがきなば誰か光の見をざらむ心の玉は石ならめやは
清水廣景
なす業の成ざらめやは成す業の成すと捨る事しあらずは
瀧村鶴雄
心して爲さばなるべし何事も成らぬは人の爲さぬなり覺
三品法親王 荒木田守武
やすらはいなほを積らむ降雪にしひてやこえむ冬の山路
世の中に書べき事は書かずして事をかく也恥をかくなり
世の中に錢だに持ば藝能もいらぬと我は思ふべからず
世の中に藝能ありて其上に錢をば人の持たぬ者かは
一聲も時鳥よりきいたきは道あることを語る世の中
世の中に物の稽古をするがなるふじの高根に名を擧よ人
能智あり覺えのあらば程よりも賞観せんと思へ世の中
世の中の人にも問はてする事は可笑事のはんべらんかな
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

心して事をば急げいそげたゞさはり出くるものは世の中
同 雨そしく軒の下石くぼみけりかたき業とて思ひすてめや
守 部
天地のはじめの時にありそめし萬の事も傳へ來る書
本居 太平
今の世は月に日にげにあらはして彌たらひ行く道々の書
同 唐國のその國文字も我物とつたへて書けば事足らひけり
同 事のみか思ふ心の有様も書にしるしてみする唐文字
同 唐文字は物の形になぞらへて作り置けるをさかしかり覺
同 から學び書の博士に習ひてぞ書よむすべは知るべかり覺
同 から書を習ひよまずば唐土に事かよはさん便えざらむ
同 中々に文かく術も習はずば唐のさかしら知らずや有まし
同 近き世の文どもよみてから國の俚言をもよくぞ知べき
同 あたし國譯の傳へは待ずして文字もて示し問事もあらむ
同

筆もちて言語らはどから學び拙なからんぞ恥かしからん 同
 遠づくにしらぬ境の言の葉もふみ見る道に行かよひけり 同
 古への跡をたづねて學ばずば世々へて道や淺くなりなん 同
 たゆみなく年へてよまば自らなどかよき歌出來ざるべき 同
 尊きや古ことふみと御代々々の大和ふみにぞ心よすべき 同
 眞直なる倭心に學びてぞ神のまことの道は知るべき 同
 子よ孫よ己れさかしと思ふとも親の愚かに猶おとるらん 今川了俊
 いたづらに過す月日は多けれど道を求むる時ぞ少なき 道元禪師
 怠らず行かば千里のはても見む牛の歩みのよし遅くとも 光 淳
 古への水の鏡はくもらぬどくもらぬ世にはなほ磨くらむ 白河樂翁
 しみの巢と爲んも憂や古文を學ばずとも手にふれて見よ 蓮如上人
 敷島の大和心をたねとしてよめや人々かの國のふみ 河越少將

たてそむる志だに動かずば龍のあぎとの玉も取るべし 大國隆正
 飛彈たくみほめて造れる眞木柱たてし心は動かざらまし 加茂眞淵
 如何して光りそへましもすれば消えなんとする法の燈 覺圓僧正
 竹の根の下はひ渡るふしの間もけふの日陰を仇に暮すな 橘 千 蔭
 千枝百枝茂れる松もその元はたゞ二葉より生ひ初にけり
 後れなば梅も櫻に異ならずささきがけてこそ色も香もあれ
 埋もるゝ垣根の雪に匂ふなり春の隣りに咲ける梅が香
 明日もまた朝とく起てつとめばや窓にうれしき有明の月
 日の本の光をそへて外つ國のみなどを照す秋の夜の月 西郷隆盛
 弓矢とる身にしあらねど一筋に立てし心の末はかはらじ 僧 月 照
 磨き得て國の寶となるものは人の心の玉にぞありける 同
 誰も世に仕ふる道は夏草の事しげくともいとほざらなん 中原遠忠

唐土の鳥のあとこそ捨やらね吾秋津洲の物ならなくに 鈴木重嶺

教へ文讀みつゝあれば冬の夜も心からこそ温りぬれ 下村房次郎

暇なき身にも物をば習へかし塵もつもりて山となるまで
なほざりに筆をな執りそ書くと言ば心の限見ゆる者なり

(洛陽城裡見秋風 欲作家書意萬重 復恐匆匆說不盡 行人臨發又開封。)

火の中をわけても法を聞くべきに雨風雪は物の數かは

井を掘りて今一尺で出る水を掘ずに出ぬと云ふ人ぞうき
氏よりも育ちなりけり人はたゞ花はみ吉野月は更科
早起きは枝も榮えて花も咲き末はよくなる身こそ樂しき
瀧登る鯉の心は張弓のゆるめば落るもとの川原へ

下見れば我にまさりし者もなし笠とりて現よ天の高さを
云ふ人の高きいやしき隔てなくたゞよき事を我物にせよ
説法に心の花は開けても其實となれる人は稀なり
善き事を知らぬ其身のかなしさは鐵砲ばなしさては人事

○茶の湯百首の中に

其道に入んと思ふ心こそ我身ながらの師匠なりけり
習ひつゝ見てこそ知るれ習はずに善惡云ふは愚かなり覺
我を捨て人に物問ひ習ふこそ後は上手の基なりけり

○晋茶山諸生を訓誡して

かん鍋で酒飲む人は多けれど本讀む人はちろりと見えず
豆蒔て豆は出來れど人蒔て人はどうやら心もとない
みがけたゞ力拳にみを入れて地獄の鬼にまけてかへるな

一 休

あらむねん治まる御代に生れ來て疊の上でのたれ死する

千なりや蔓一筋の心より

加賀千代

蝸牛富士に上らば上るべし

茶の湯とてつめたき日にも稽古かな

まかはして花吸ふ蜂の往還り

初空や家のおきての七ツ起き

精出せば氷る間もなし水車

石山で磨いて晴れし秋の月

影ふまぬ弟子にはあとをふまへさせ

雨 且

羽 白

蓮之或ハ桂林

鶏 周

園 風

龜 翁

學問はせねばならぬと十五年(一—十五)

學問は仕たいものぢやと十五年(十六—三十)

學問は是非にしたいと十五年(卅一—四十五)

學問はとても出來ぬと十五年(四十六—六十)

うたたねの書物は風がくつて居る

讀めぬ字は何と云ふ字に讀て置き

延びた蕎麥喰て味へ 因循家

勞して孝子の種もとる探訪者

居候この癖めと思へども

股に錐さすさへあるに糠に釘

國を去て産婆も遠く洋行し

師の恩を忘れた文字に思ひ出し
宵越の芥子に等し借た智恵
秦以前馬鹿と何房は世に潜み

三 勤 勉(職業)

○御製

燕飛ぶかげのみ見えて田植時家に人なき小山田のさと

○御製

家富みてあかぬ事なき身なりとも人の勤めを怠るなゆめ

○御製 御題 夏車

重荷ひく車の音を聞えける照る日の暑さたへ難き日に

○御製

世の中の人におくれを取りぬべし進まむ時に進まむりせば

○皇后宮御歌

降る雨の水も足りぬと喜びて濡れつゝぞ取る小田の稚苗ワカサヘ

白雲の八重たつ峯もちりひぢの積りてなれる山にあらずや
常盤なる松も色そふ時を得ていく代千春の榮をか見む
あけぬとて名のる鳥の聲のうち山ぎは白み春は來に鳥
しられじな氷をかづく鴉鳥のそにくだくる心ありとは
大空の思はむことも耻しなさしあふぎつゝかくて過さば
世の中の正體なしは爲す事も無れば歩き來ては寐るのみ
いたづらに着る人思へ織る機ハタオリのきぬの糸目の心づくしを

後山本前
左大臣
池野玉瀾
荷田蒼生子
攝政大臣
大政良基
前大僧正慈鎮
荒木田守武
鳥丸光廣

忠實におぼしたてなば宿毎に花も咲くべし實も結ぶべし
 御貢物はこびつかふる民草は我大君の大御たからぞ 本居 太平
 明るより急ぎ出たちをちかたの田に立ち暮す田人いそしも 同
 夏の日の暑き盛りも涼えず田におり立ちて田草取る田子 同
 小舟漕ぎ波の上涉り海幸ウミサチの釣し網ひく浦のあまの 同
 浦波にめかり鹽くみ朝夕にぬれつゝわたるあまの衣手 同
 眞柴かりぬりそぬりゆひ荷ひもち苦しき山路かよふ山人 同
 宮材ミヤキさりうつや斧音ノコトの梢よりほとくしくも見ゆる杣人 同
 豫じめ高さ廣げささはかり屋づくり立つる工いそしも 同
 組上ぐる桁梁のあやふさをふみなればしる大工はも 同
 つくりうり萬の物をたらはすは國の寶ぞ手人商人テヒトアキヒト 同
 人の爲に買ひ賣る物のくばさもておのが世渡る市女商人イチメ 同

人の脊におはぬ重荷を上荷うちて驛路かよふ旅籠馬かも 同
 稻はこぶ田人の力助くとて殊におひもつことひ牛かも 同
 大津より野ゆき山こえ車牛とゝろくとかよふ都路 同
 三人四人荷ひもあへぬ重き荷を力車ぞやすくつみゆく 同

二宮尊徳

天の日の恵み積み置く無盡藏鍬で掘り出せ鎌でかりとれ
 過し事來らぬ事はいらぬなり今日の事こそ大事なりけれ
 世の中は今日より外は無りけり昨日は過つ明日は來らす
 昨日過去今日は現在あす未來起さての神に寐てのみ佛 一
 明日の事昨日の事に渡らずにたゞ今橋を渡れ世の人
 品物に念を入れるを忠といひ高利取らぬを義とは云ふ也
 商賣に忠義立つれば御得意の擅那がよつて子孫繁昌 休